
のんびり行こうよ？

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のんびり行こうよ？

【Nコード】

N1023A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

靈感少女、神崎ゆすらと、態度がでかくて、我が儘で、でも憎めないヤツなウサギ妖怪・翡翠ひすいとの珍道中！

出逢い（前書き）

ども、維月です。

今回は、初めてコメディ（らしきもの）を書いてみました。まだ至らぬ点もあるかも知れませんが、まあ、楽しんで読んでくださいな

出逢い

「くおの…バカ息子が！？これ程言っても、群れを継がぬと言うならば、仕方ない…」

四方八方に、怒号が轟き、地面をたわませた。
中国、某山中。

の崖の上。

大中、二つの影が、激しく言い争っていた。

「なんだよ親父、許してくれんのかよ？下界行き」

二つのうちの、中くらいの方の影が言う。

動く影は、どうやら獣の形をしているようだ。

「許すもなにも…好きにするがいい」

「おつ、ホントかよ親父！」

中くらいの獣が、嬉しげにぴよんぴよんと跳ね回る。

しかし、次の父の言葉に、彼はぴたりと動きを止めるのだった。

「その代わり…」

「な、なんだよ…いいんじやねえのかよ？」

「その代わり、お前など勘当じゃ」

「へ？」

「勘当だと言っておるっ、どこでも、好きな場所へ行くがいい

！？」

蹴りました。

お父さん、息子、落ちていきますよ？

いいんですかね？

「くっそじじい、てめえ、本気で蹴りやがったなあ！死んだって、こんな山にや戻ンねえよ、安心しなっ」

いや、暴言はいてますよ…

崖を、いや、山から転げ落ちていく息子にはちらりともせず、彼の父は、かけ去っていった。

お父さん、無視ですか。

ああ、大自然の、なんと厳しいことよ。

もう、どこまで転げ落ちただろう。

やっと、回転が止まったところで、彼は目を開いた。

「つてえ、あのじじいめ…絶っ対に許さねえ。うーん、でも無傷なのが、唯一の救いだな。てか、ここどこだ？」

彼は、ひよこり、と後ろ足で立つと、空気の匂いを嗅いだ。長い耳は、敏感に音を聞き分ける。

「人里まで、下りてきちまったみてえだな、どうするか」
しばらく迷った末に、彼は歩き始めた。

転落のせいで、もう力の限界が近いのだ。
どこか、緑のある場所で、休まなければ。

彼は、ふるるつ、と身震いして、小さく唸った。
気を、飛ばす。

気を飛ばして、場所を探しているのだ。
家を一軒、二軒通り越し、市場を抜けて。

街外れの、湖畔にあるリゾートホテル…
見つけた！

彼は、走り出す。
ぴょん、ぴょんと、屋根をいくつも飛び越えて、大きな兔が、空を

かけていった。

「ちょっと、ゆすらつてば…待ってよう、どこ行くのよ」

深闇の広がる、森の中に行く影が二つ。
ちなみに、二つの間隔は少ししか、離れていない。

前に行く、ゆすら、と呼ばれた少女が、気遣わしげに振り向いた。
彼女の、背中を被う、赤みを帯びた茶色の髪が、夜風にそっと揺れる。

「どこつて、散歩じゃない…ホテルからも近いし、いい場所」

「こんなに暗くて、気味悪いのにな？あんたのことだから、オバケ見たって、怖くないかも知れないけどさ、あたしは、フツウの人なんだからねっ」

「もう、相変わらずね、綾子は。なんもないよ？」

そう言いかけて、ゆすらは動きを止めた。

「なっ、なによゆすら…やっぱり、いるの？コレ」

気弱な、彼女の友人・綾子は、両手を前で下げ、オバケのポーズをしてみせる。

「うっん、兎がいる」

そう言うと、彼女は、ぱつと顔を明るくさせた。

彼女は、かなりの動物好きなのだっ。

「えっ！どこどこっ、野生動物よねっ？」

「う、うん…ほら、あそこに」

ゆすらは、今いるここから、大して遠くない場所にある、木の根本を指さす。

根本には、大型犬くらいの大きさをした、獣が寝そべっていた。

「もーっ、どこにもいないじゃな…ってまさか、あんたまた？」

綾子は、残念半分、呆れ半分のため息をついた。

「らしい、ね」

そうなのだ。

あたしは、ほかに見えないモノが、見える人なのだ。

そのせいで、気苦労がたえなかった。

友人はいるけれど、それ程仲がいいというわけでもない。

だが、今、一緒に旅行してくれている彼女は、幼稚園からの幼馴染みで、あたしの、よき理解者である。

ゆすらは、ちらり、と獣の方を見た。

月の光を弾いて、つやつやと輝く毛皮は柔らかさそうで、ゆすらは触つてみたい衝動に駆られた。

「ちよつと、行ってくるね？そこで、待っていてくれる？」

「い、いいけど…平気？」

「うん」

ゆすらは、寝そべったまま動かない獣に、そっと近づいた。

「なんだ、お前：俺が見えんのか？」

耳だけをゆすらの方に向けて、獣が話しかける。

決して、機嫌がよいとは言えない声に、ゆすらは、おや、と瞳目した。

声は、意外に若い男の声だったからだ。

「話せるんだ、妖怪さん」

「まあ…で、お前は？」

寝そべった大きな兎は、けだるそうに、ゆすらに顔を向けた。

「え、あたし？人間、だけど」

「そんなの、見りゃ分かる、名前だよ、名前っ」

「あたしは、ゆすら。神崎ゆすら」

「ふーん、ゆすらね…俺が見えるなんて奴も、いるんだな」

興味なさげに言って、彼は毛繕いを始めた。

っていうか、かなり無遠慮な奴だ。

毛が飛び散っている。

そんな中で、ゆすらは、兎がしきりに鼻を気にしているのに気がついた。

「あんた、ケガしてるのね？どね、ちよっと見せて？」

兎は、頭を撫でられて、慌てて後ずさった。

「やつ、やめろ…余計なことすんじゃねえ！ほっとけば治るっ」

ふいつ、と顔をそむけた彼に、ゆすらは、くすくすと笑った。

「なっ、何が可笑しいっ」

「カワイイな　て、でも、このくらいはさせてちょうだい」

ゆすらは、ムキになる彼の鼻面を、そっと撫でてやった。

「ん、なんだよ…これ」

彼はしきりに、絆創膏を爪でつつきながら聞いた。

「絆創膏よ、鼻の頭、すり剥けてたからね。治るまで、取っちゃダ

メよ？」

毒気を抜かれた彼は、きよとん、とゆすらを見つめた。月の光に、彼の毛皮は銀色に輝き、淡い緑青の瞳は、宝石を思わせる。

しばらく、両者の間に静寂が流れた。

しかしそれは、すぐに彼の腹の音で破られた。

「なあ、なんか食いもん、持ってねえか？力が足りねえんだ」

「持つてるけど、兎：こんなもの食べれるかなあ」

ゆすらは、ごそごそとポーチをあさると、アルミホイル包みの、握り飯を出して見せた。

すると、彼は巨体を起こして、ゆすらの太股に両前足を乗せた。

ピコピコ、と鼻を動かす様は可愛いが、これが、普通の大きさなら、もつとカワイイのになあ、と、そんなことを、内心で少し考えた。

「ふんふん、なんか、美味そうな匂い」

彼が、受け取った握り飯を、包みのまま食べ始めたので、ゆすらは慌てて包みを剥がす。

「ん？なんか、問題あるのか？」

「あるわよつ、大あり！お腹壊したらどうするのよつ」

ゆすらは、アルミホイルを、取り上げて怒鳴った。

「怒鳴るなよ、耳痛えなあ。あのな、俺たち黄兎こいつっていうのは鉱物を食って生きてんだ、ちなみに、その薄っぺらいヤツも金属だけ」

伸びあがって、ゆすらからアルミホイルを取り返すと、山羊が紙を食べるように、あつという間に平らげてしまった。

「お、美味しかった？」

舌なめずりしている兎に、おそろおそろ、ゆすらは聞いてみる。

「まあまあ、かな？」

（まあまああって、あんた：人からもの貰っておいで）

がつくりと、肩を落とすゆすら。

「とりあえず、元気でたのよね？あたし、もう行かなきゃ：人を待たせてるのよ」

背中を向けたゆすらに、彼は名残惜しげに話しかけてきた。

「また、ここに来るのか？」

「え？うん…こっちにいるうちなら、来れると思うけど」

「そっか、待ってるぜ。また、なんか持ってきてくれよな」

彼は、嬉しそうに尻尾を振った。

「う、うん」

これって、結局パシリじゃないですかね？

(な、懐かれた…妖怪に)

さよならから…(前書き)

口の悪い、でも可愛いウサギ妖怪・翡翠に逢い続けるゆすら。 < b
r >しかし、二人に別れの時が来た。 < b r >

さよならから…

次の夜も、ゆすらは一人、ホテルを抜け出して森に来ていた。

「え と、あ…：いたいた、ウサちゃん」

ゆすらは、木の根本に座る彼を見つけると、頭を撫でた。

「おう、ゆすら…：ふああ、なんか、持ってきてくれたか？」

昨夜に比べて、かなり縮んだ彼を抱き上げて、ゆすらは尋ねた。

「なんか、サイズダウンしたね、どうしたの？ウサちゃん」

「うっ、ウサちゃん言うなっ、ちゃんと名がある！」

彼は、ゆすらの腕から脱出すると、足を鳴らした。

「名前？そう言えば…：知らなかったわね」

「ったく、オレの名は翡翠だ、ヒ・ス・イ、もうウサちゃん言うんじゃねえっ」

翡翠は、後ろ足で頭を掻きながら、めんどくさそうに言った。

「今のサイズのままなら、可愛いのにねえ」

「は…：それだが、今日は月が出てないだろう、こういう夜は、妖力が半減しちまうんだよ」

「ふうん、月華^{げっか}を吸ってるんだね」

月華とは、月の光のことだ。

月はすべてに、なにかしら強い影響を与えられている。

「ああ。なあ、ゆすら…：お前は、旅行者なんだろ？」

「ええ」

「いつまで、ここに來れるんだ？どこから來たんだ？」

小兎の、緑青の瞳が、不安げに揺れた。

「たぶん、今日が最後、明日の朝の便で、日本に歸るわ」

「それまで、ここにいるんだよな？」

翡翠は、寂しそうに、ぺしやりと両耳を下げた。

「うん」

「いいモン見せてやるっ、ついてこいよ」

「え、あのちよつと、翡翠っ?」
翡翠は、走り出す、ゆすらも後を追った。

森の中を、ひたすら走り、藪を掻き分け、川を渡って、景色が一望できる高台に登った。

辺りはまだ暗く、遠くに、街の夜景が星くずのように、明滅している。

ゆすらは、翡翠を抱きあげる、すると、翡翠はゆすらに顔を寄せてきた。

「翡翠?」

「寒いか?もうすぐ夜明けだ、待ってる」

「う、うん」

そうするうちに、いつの間にかネオンが消え、空が白み始めた。

「見てる、明けるぞ」

「うわ…すごい」

朝焼けが、赤く、世界を染めていく…

生まれたての、柔らかな風が、二人を優しく撫でた。

「だろ?俺な、この瞬間が、一番好きなんだ」

「ありがと、翡翠…いい子ね」

ゆすらに撫でられた翡翠は、気持ちよさそうに、目を細めた。

「照れるぜ…」

「お別れだね、翡翠…短かかったけど、元気でね」

翡翠の茶色い毛皮を、ゆすらの涙がぬらす。

「おいおい、別れてるのは、笑ってするもんだぜ?泣くんじゃねー」

翡翠は、ぺろり、とゆすらの頬を舐めた。

「そだね、そだね…」

ゆすらは、涙を拭いて、翡翠を降ろしてやった。

「行け、もう振りむくなよ?」

「う、うん!」

去っていく、ゆすらの背中を、翡翠は、いつまでも見送っていたの

だった。

そうして、ゆすらの中国旅行は、静かに幕を閉じた。

… ように見えた。

天災は、忘れた頃にやってくる！（前書き）

中国旅行から、半年後の夏。
ゆすらの元に、差出人不明のダンボールが届いた。
ダンボールの中には…
霊感少女、神崎ゆすらと、我が儘で口が悪いけれど、なぜか憎めないウサギ妖怪・翡翠の珍道中！

天災は、忘れた頃にやってくる！

炎天下の熱が、アスファルトを灼く。そこかしこで、蝉の集すだきが聞こえる、いまは夏だ。

あの中国旅行から、半年が過ぎていた。

遠くから、かすかにエンジン音が近づいてくる。それは、角からぬつ、と頭を覗かせて、狭い道路をいっぱいに占領して停止する。

ぎっ、と鈍い音がして、お屋敷の大門の前に、いるだけで暑苦しい、トラックが止まった。

ピンポ

ン。ピンポ

ン！ピンポピンポ

ン！

涼しげな呼び鈴が、せわしなく玄関に響く。

「うるさいなあ…もう、誰よ〜」

二階の自室で、パソコンの画面に向かっていたゆすらは、重い腰を上げた。

無視をすれば、荷物を置いて帰るだろうと思い、そのまま10分ほど放置しておいた。

しかし、なかなか帰るそぶりがなく、現在に至っている。

なぜかしぶとい配達員に、根負けしたのだった。

「はい」

ドアを開けると、予想したとおり、配達員の男がダンボールを抱えていた。

「神崎、ゆすらさんですよね？判子か、サインお願いします」

「あ、はい…」

ゆすらは、サインを書きながら、内心訝しく思った。

（どこからだろう、なにも書いてないし。しかも…なに、生もの！
？どうしよう、もうサインしちゃったしなあ）

「それじゃ、はい。ありがとうございました」

内心のぼやきも空しく配達員は、ムダに爽やかな笑顔で、去っていった。

「は、はい」

作り笑顔が、哀しい…

（んもう…どうしてこうなるのよ

！）

配達員の男が行ってしまったから、ゆすらは、自己嫌悪に打ちのめされていた。

「はあ…とりあえず、これ運ばなくちゃ」

一体何なのか。得体の知れないダンボールを抱えて、ゆすらはとぼとぼと玄関に入ってしまった。

「ん

」

ゆすらは、腕組みをして、ダンボールとにらめっこ。

この箱の中身は、一体何が入っているんだろう？

そもそも、このダンボールは、どこからきたんだろう？

いくら考えてみても全く、心当たりがないのだ。

「まったくもう、贈り主の名前もないし、怪しいわよ絶対！箱開けたら爆弾とかだったりして。こういうのは、用心が肝心よねっ、うん」

ゆすらは、そう言いながらも丁寧に、ガムテープを剥がしていった。やはり、気になるのだ。

危機感より、好奇心が勝ってしまった。

が、しかし、蓋を開ける気には、なぜかなれなかった。

細かに手が、震える。

ダンボールの前で迷うことしばし、蓋を開こうとした彼女は、聞き覚えのある声を聞いて、ぴたりと動きを止めた。

「オイオイ、早く出せよ…ここ、熱いんだ」

声と共に、うにゅ、うにゅ、とダンボールの持ち手から、茶色い小さな鼻面が覗く。

「えっ、まさ…か、生ものって」

「おう、俺だ…翡翠だ」

ぱか、と頭でフタを持ち上げて、茶色い兎・翡翠が顔を出した。

「ちよつ、ちよつとアンタ、どうしてえ!？」

ゆすらは、ダンボールを逆さにして、底を叩く。

「厄介になるぜ、よろしくな…ゆすら」

身震いを一つして、無事、ダンボールから脱出した彼は、ニヤリと人間のように笑って言った。

「ちよつと、どういうことなのよ

!？」

「うおつ、耳痛えって…怒鳴るなよお」

翡翠は、両耳を手で押さえながら、小さな体を、さらに小さく縮ませた。

ゆすらは、まだ青い顔で、おそろおそろの彼に尋ねてみる。

「ねえ、どうしてここが分かったの？」

「ああ、それが…お前の気配を辿ってな、やっと見つけたって訳だ」

「ふう　ん、やっぱり妖怪ね、ウサちゃん」

ちろり、と流し目で言うゆすらに、翡翠の毛皮が逆立つ。

「うっ、ウサちゃんて言うんじゃないねえ！」

翡翠は、気に食わないとばかりに、ゆすらに頭突きをした。

「痛くないんですけど…その割には、嬉しそうじゃない」

「そりゃ、手加減したからだ。お前に逢えたから、嬉しいんだよっ」

もごもご、という翡翠は、なんだか照れているようだ。

「はあ…そりゃ、どうも」

「なんだよお前、ち　　とも嬉しくなさそうじゃねーか」(怒)

「そっ、そんなことないわよ!？」

そんなこんなで、ウチに、妖怪の居候が増えた…

天災は、忘れた頃にやってくる！（後書き）

こんばんわ、維月です。
『のんびり行こうよ？』のお届け
です。
今回はまた、翡翠再びです。
ゆすらに目を
付けた彼はちよつと、運が悪いです。
ゆすら。彼女、実は
…
それでは、どうぞご賞味くださいな

陣取り合戦！（前書き）

黄兔〃ウサギ妖怪・翡翠と同居し始めたゆすら。
我が儘間な翡翠に振り回され、ゆすらは疲れ気味。
騒動たつぷりの同居生活。さてはて、どうなることやら…
靈感少女・神崎ゆすらと、口が悪くて我が儘だけど、なぜか憎めない奴なウサギ妖怪・翡翠の珍道中。

陣取り合戦！

ウチには妖怪が一匹、棲みついている。

それは、今あたしのベッドを占領しているコイツ

翡翠だ。

「もう、寝苦しいのよ…ちゃんと、アンタ専用の寝床用意してあげたじゃない」
ラビットケージ

「いやだね、こっちの方が、寝心地がいい。ゆすらばっかりズルいぞ」

茶色い兎が、コロコロンとベッドの上を転がりながら言う。

邪魔で仕方がない。

以前、一度だけベッドに寝せてやったことがある。

それで味を占めたのか（絶対そうだ…）コイツは凶々しくも毎晩ベッドを占領するようになった。

「はいはい、カゴに戻ろうね？」

ゆすらは、翡翠を抱き上げて、ケージの中に入れてやり、鍵をかけた。

「おい、コラゆすらっ、てめーっ…んな場所ちつとも嬉しくねえよ、出せってばー！」

「だって、毛抜けるじゃないの…イ・ヤ・よ、じゃあおやすみ」
バシン、と勢いよくドアが閉められる。

「あ！くそう、ゆすらの奴めえ…あうう、下心だったのが、いけなかつたのかあ？」

翡翠は、兎らしからぬ、胡座ひげまをかきながらばやいた。

もう、言葉を話す時点で、普通ではないのだが。

「しかしだな、あいつは…重大なミスをした！こんな鉄檻、食つちまえば出られるんだよなあ」

兎の手で、ピースをする翡翠。

そんな悪巧みをしているが、ケージの中が狭いので、思いつきり頭をぶつけてしまった。

「ぐおっ！？…てえ、狭い場所はキライだ！」

虫食い穴を開け、ケージから脱出した翡翠の前に、また新たな難関が、立ちはだかつていた。

「次は、これだな」

ゆすらの、部屋のドアである。

「ったくアイツは、毛が飛ばなきやいーんだろ？要は、形を変えりやいいって事だ」

翡翠は、身震いを一つすると、水飴のように、形を歪ませた。

どンドン形がなくなり

それから、大きく膨れあがったか

と思うと、そこで、ふいに動きを止めた。

のそり、と人影が起き上がる。

「あの姿だから、ナメられたんだな…よし、これで問題解決！アイツばっかし、いい思いさせねえぞ」

茶髪をガシガシ、と掻いて、翡翠はドアノブに手をかけた。

居候のクセに、生意気です。

「さーあてとつ、とつととゆすらの奴を叩っ起こし…ぶへっ…！」

ドアを開けた翡翠の顔に、枕が直撃！

「ブツブツと、うるさいわね…なんなのよアンタはっ」

眉間にシワ。

ゆすら、不機嫌モード全開である。

「ってて、ぬゑにしゃがるっ、バカゆすら…！」

ゆすらは、ふいを喰らって瞠目した。

「え　　あの、どちら様？」

いきなり現れた謎の美男に、ゆすらは半歩後じさる。

「見て分らんかつ、翡翠だよっ！」

「え？　　あ、そう」

「そうだ」

二人の間に、しばしの静寂が流れる。

「じゃ、そういうことで、おやすみ」

「くおら、現実逃避すな！」

部屋に引っこもうとしたゆすらの髪を、翡翠は慌てて捕まえた。

「痛い、もう！アンタ、人間にもなれるのね」

「当たり前だつ、あんな狭い場所に閉じこめやがって…許さねえぞ」
ゆすらに、青筋が浮く。

この兎は、居候のクセに、どこまで我が儘なんだろうか。

「もう、何が不満なのよつ、ちゃんと寢床も用意してあげたのに」

「全部だつ！俺あこれからは、この格好で過ごすことにした！」

「だから、なに？」

「部屋だよ、部屋よこせ」

どうやら、コイツは自分専用の部屋が欲しかったらしい。

両親が亡くなり、使用人も、もういないので部屋は腐るほど余っている。

だから、別にいいのだが。

欲しいなら欲しいと、素直に言えばいいのに。

「いいよ、廊下の脇の和室使って」

「ホントか！サンキュ」

「ああ、と一気に顔を明るくする翡翠。

現金なものだ。

「布団は押入れね」

「おう！」

意気揚々と跳ねていく翡翠を尻目に、ゆすらは、深く溜息をついた。

「あ　　これで、やっと眠れる」

しかし、ゆすらがベッドに入った頃には、すっかり夜が明けていましたとさ…

まあ、人生…焦らず急がず。

のんびり行こうよ？

海に行こう！（前書き）

騒動たっぷり、波瀾万丈の同居生活を始めて、ひと月。
相変わらず、我が儘な翡翠が、今度は…
靈感少女・神崎ゆすらと口が悪く、我が儘。だけど、憎めない奴なウサギ妖怪・翡翠との珍道中！

海に行こう！

皆さん、聞いてください。

ウチには、すっかり人間化した妖怪が、棲みついています。

まあ…人間化したといっても、やっぱり妖怪なので、なにかと大変なのです。

「ゆすらー、メシ！」

翡翠は、ゆすらに向かって茶碗を突きだしていた。

「あんたねえ、これで終わりよ！何杯目だと思ってるのっ？」

毎朝、この調子だ。

食べ盛りの子供でもないクセに、コイツはよく食べる。

単なる、大食漢なのか？

「いーじゃねえかよ、美味いんだから」

「う…分かったわよ、ほらっ」

「おっ、サンキュー」

もう、何杯目かも分からないゴハンを、嬉しそうに食べる翡翠を見て、ゆすらは溜息をついた。

『美味しい』と言われて気を悪くする奴は、少ないんじゃないかとあたしは思う。

しかし、こいつと暮らし始めて、ひと月。

未だ、苦勞が絶えない。

例えば。

パソコンの回線は食いちぎるし。

包丁を食べて、驚かせるし。

リモコンは嚙って壊して、もう5台目だし。

以下略ッ！

「なあなあ、ゆすら…俺、あれ行きたい」

彼の指先は、テレビに向いている。

「海？」

しかも。

コイツ、妙に世間慣れしているのだ。

「ここから近いだろ？なあ、行こうぜえ」

ねだる翡翠が子供のようで、ゆすらは苦笑してしまった。

「ふう…ここんトコ、仕事もないし。いいわよ」

「やりい！じゃ、今すぐ行こうぜっ」

どこからか、浮き輪を取り出す彼に、ゆすらは面喰らった。

いや、ちよつと今からって…。

もう行く気満々だし。

「用意してくるっ」

「え、あ…うん」

嬉しそうに跳ねていく翡翠に、ゆすらは、本日何回めかの溜息をついた。

(子供みたい…)

ということ、海につきました。

翡翠、なんか、はしゃいで注目されてるし。

恥ずかしいなあ、もう！

外見も、結構いい方だし、若い娘こにモテている。

…けど、気にしてないみたい。

(つて、あたしも一応、若い娘なんだが…)

「ゆすら、ゆすらっ…あつちで氷売ってるぞ、あれ食いたいっ」

あっ！コイツ、またっ(怒)

焼きイカを、頬張りながら言う翡翠を、ゆすらは思いきりどついた。

「もう！よくそんなに食べられるわねっ、しょうがないなあ…あと

一つだけで終わりよ？」

ゆすらは、ごそごそ、と財布から小銭を出して、翡翠に渡してやる。

「ホントかつ、サンキュウなっ」

無邪気に笑って屋台に走っていく彼に、いつの間にか、見とれてい

る自分に気づいたゆすらは、慌てて頭を横に振った。

(いけない、いけない…あたしとした事が！)

一瞬、あいつがカツコよく見えた。

ううん、ダメ。

あいつは妖怪。

カツコよくても妖怪。

炎天下のせいで、のぼせてしまったらしい。

なんだか、クラクラするので、日陰に移動…屈んで休む事にした。

(はあ…あたし、なーにやってんだろ)

「きやつ」

溜息をつきかけたその時、頬に冷たい物を宛てがわれて、ゆすらは飛び起きた。

「ほれ、冷たいもん。お前、暑いんだろ？」

顔をあげると、そこには逆光を浴びた翡翠。

「あ、ありがと…でも、これどうしたの？」

(どっから沸いて出たんじゃ、コイツは)

一応、にこやかに礼を言うが、ゆすらは内心毒づく。

渡されたのは、ミネラルウォーターだった。

「屋台のおっちゃんがな、オマケしてくれたんだ。お前に持ってってやれって」

(へえ…案外、優しいところあるじゃない。ありがと、翡翠)

「そっか、ありがと、翡翠」

ちよつとは、見直したかも。

しかし、につこりしたのも束の間。

再び、ゆすらの笑顔に青筋が浮いた。

「おう、じゃあさ、次あれ食いたいなっ」

翡翠が、はしやぎながら『お好み焼き』の屋台を指さしたからだった。

前言撤回っ！(怒)

どこまで食べるつもりなんだ！このバカ兎はっ

「だーめ、帰るわよ。もうすぐ夕飯なんだから、我慢しなさい」

「ちえ…まだ食い足りねえよ」

名残惜しそうに、じたばたする翡翠を、ゆすらは引きずっていく。

「仕方ねえなあ、そんじゃ、これでチャラにしてやるか」

「ちよつと、なにすん…」

翡翠が、迫ってくる！

「や…んっ」

瞬間、ゆすらの髪が逆立った。

いや、実際に逆立ったわけではないが、かなりの衝撃を受けたのは確かだった。

(ちよつと…キス、されちゃった！？よ、妖怪に

っ)

ゆすらの、青かった顔が、一気に赤くなっていく。

「なっ…な、なっっ、なにすんのよっ、この変態ウサ

！？」

ぱんっ

「んぎゅっ!？」

夕暮れの空に、むなしく音がこだました。

そのあと、殴られた理由が分からず、翡翠はずっと首を傾げていたとかなんとか。

「ヘンだな　俺、なんか悪いこと言っちゃったのか？」

台所からは、必要以上に大きな包丁の音が聞こえてくる。

一方ゆすらは、トマトのように真っ赤になっていた。

(翡翠のバカ！バカ　！でも…)

いきなりのことに、混乱してしまったのだ。

でも、叩くことは…なかったのかも知れない。

ゆすらは一瞬、手を止めた。

「あ、あのう、ゆ、ゆすら？腹、へったんだけど」

背中に視線を感じて振りむくと、遠慮がちに、翡翠が話しかけてきた。

まるで叱られた子供が、親に許しを請うように。
あたしも少し、やりすぎてしまったな。

ごめんね、翡翠。

「翡翠」

「な、なんだ？」

（ま、まだ怒ってんのか?!）

視線を合わせてきたゆすらに、翡翠は慌てて後じさる。

「ゴハン、もうすぐでできるから、待っててね」

「え」

にっこりと笑いかけられて、ぽかんと間抜け面をした翡翠に、ゆすらは、プツと吹き出してしまった。

「おま…もう、怒ってねえのか？」

「怒ってないわよ、別に。ほら、お皿並べるから、出してきて」

「ゆすら…お前」

（怒ってないってこたあ、してもいいって事か!?! そうなのか、そうなんだなっ）

大きなカン違いである。

「な、なに？」

じっと見つめる、彼の視線がヘンに熱っぽい。

病気にでもなったのか？

もしかしたら、撲ちどころが悪くて、おかしくなったとか…。

海に行こう！(後書き)

こんばんわ、維月です。
読者様方、ここまでご苦勞様です。

です。
翡翠、ゆすむに気があるように
すねえ。
でも、彼女は…
期待ください。

戀書 こいつぼみ (前書き)

ゆすらに想いを寄せる翡翠は、ついに、彼女に告白！
し…

戀書 こいつぼみ

「とりあえず、ゴハンよゴハン！おいで翡翠っ」

ぱちん、と妄想が弾けると同時に引っ張られ、翡翠は転んだ。

「ってて…腹が減っては戦はできん、て言うしな」

腰をさすりながら言う彼を、ゆすらはねめつける。

「なに言っただか、はい、ゴハン」

「おう、あんがと」

ゆすらは、なにかイヤな予感を感じつつも、味噌汁をすすった。

（戦って、こいつ…なんかするつもりかしら？）

「おかり」（おかわり、と言っている）

そう言っただ茶碗を差し出す翡翠。

「おかわりって、もう？」

同じに食べ始めたのに、翡翠の皿は、すべてが空からになっていた。

「お前が遅すぎんだよ、食べないんなら、俺が食うぞ？」

「あたしはこれが普通なのっ、ほら」

「おう」

おかわりしたご飯を、かき込む翡翠に、ゆすらは一筋、溜息をついた。

（なにか、するつもりじゃ、ないでしょーね？）

台所を片付けながら、ゆすらは翡翠の方を見ていた。

さつきはなにか、不穏な物を感じたが、今はというと。

そんな様子は、微塵みじんも感じられない。

くわえタバコで、テレビに集中している。

どうだ、この馴染みようは！

まあ、このご時世…人に化けて、生活をしている妖怪は数多い。

あたしの知っている妖怪は、殆どその部類にはいるだろう。

「お、ゆすら…ご苦労さん。ほれ、コーヒー」

翡翠が、さつき自分が飲みかけていたコーヒーを、渡してくれた。

「あ、ありがとう…」

温かい…。

気を、つかってくれたようだ。

「どーいたまして」

につこりと笑いかけてくる翡翠に、自分は不覚にも、赤面してしまった。

どうもコイツには…いつも負ける。

「ふあー、眠イ」

欠伸をしながら台所へ行く彼に、ゆすらは慌てて釘をさす。

「翡翠、眠いからって、ヘンな場所で寝ないでよ？この前なんて廊下で寝てて、踏んづけちゃったんだから」

尻尾を踏みつぶされた、猫のような声を上げた割には、無傷だったらしい。

「ああ、ちゃあんと寝るさ…自分の部屋で」

「よろしい。じゃ、おやすみ」

(間があいたぞ、なんだ…今の間は！)

ちら、と横目で翡翠をぬすみ見る。

昼間のこともあり、一応、警戒しているのだ。

「ん…」

そんなことには、全く気づいたふうもなく、彼は、欠伸をしながら元の、黄兔の姿に戻った。

つていうか、かなり邪魔なんですけど…。

「んだよ、どしたい？寝ないんかよ」

じ　　つと見あげる翡翠に、ゆすらは慌てた。

気配は消していたはず。なのに気づかれるとは！

「なっ、別に…言われなくても、もう寝るわよっ」

「なあ、なんで、怒ってるんだ？」

背中を向けていたゆすらは、ぴたりと動きを止めた。

ここからでは、表情を見ることはできない。

できない、が、その声で彼が、困りきつてているのが分かった。

「いきなり、そんなのって…ないじゃない。キス、初めてだったのに」

翡翠の方に向き直った、ゆすらの顔は真っ赤だった。

「…それが、なにか問題なのか？」

（は？って、アンタ…どこまでデリカシー0なのよ）

眩暈を感じたゆすらは、額を強くおさえた。

「昼間のことは、悪かったと思う…謝る。けど俺、お前がいいんだ。一緒にいると、ここが、あつたかくなる」

翡翠は、そつと胸に手を当てて、呟くように言った。

そんな翡翠に、ゆすらは、昏く笑う。

「あたしには、近づかない方がいいわ…あたしの傍にいたら、必ず、後悔する」

「なっ、なんでだよ！しねえよ、後悔なんてっ」

「もうおやすみ、翡翠…」

ゆすらは、屈んで、翡翠の頭を撫でて言った。

「ゆ…すら？」

翡翠は、凍ったように、その場から動くことができなかった。

彼女が、もう全てを諦めているような、それでいて、なにかを思い詰めたような顔をしたからだ。

「気持ちだけ、もらっとくね？」

自室の障子を閉めて、ゆすらは、ぽつりと呟いたのだった。

始末人（前書き）

翡翠の告白を断ったゆすら。
彼女には、『始末人』としての、
変えがたい運命があつた！深闇に潜む妖を、ゆすらが斬る！

始末人

月夜に、鮮血が舞う。

しかし、その色は赤ではなく、黒かった。

彼女は血刀の露を払うと、刀を鞘に収める。

黒い外套マントがひとしきり、強い夜風にはためいた。

「ごめんなさいね。これが、仕事なの」

ぽつり、と呟いた彼女に、まるで異を唱えるかのように、風がざわめいた。

強風に煽られてフードが落ち、素顔がこぼれる。

赤みがかった、茶色の長い髪。

白磁の肌。

他でもない、ゆすらだった。

ゆすらは、二つの顔を持っている。

昼間は大学生。

夜は、この『始末人』としての仕事を手がけるのだ。

しかし、彼女は決して、無益な殺生は好まなかった。

客の依頼を、なにかしらの代価と引き替えに、行っただけ。

等価交換、と言うやつだ。

「あなたはただ…主の元へ、戻りたかったのよね？化けて出てしまっ
うほどに」

ゆすらは、横たわる一匹の犬の、冷たくなった頭を撫でてから言っ
た。

懐から、赤い文字の書かれた札を取り出すと、一度手を合わせ、犬
の体に札を貼った。

彼女が貼ったのは、鎮魂札。

傷ついた魂を、慰めるための物だ。

風がざわめき、一瞬にして月が、暗雲に隠れる。

犬に貼られた札が、小さく、炎をあげた。

それから間髪入れずに雨が降り出し、ゆすらの、細い肩を叩いた。

丁度いい。

雨に打たれていれば、少しは、きれいになれるかも知れない。

穢れたあたしなど、誰が好むものか。

あたしは、獣だ…。

燃えあがった炎は、雨で勢いこそは弱まったが、雨の中でも消えずに、揺らいでいた。

秋の夜に降る雨は、急速に体温を奪っていく。

ゆすらは雨の中で、夜明け間近の、鉛色の空を見あげた。

髪が吸った水分が、幾筋も頬を伝う。

それは、彼女の涙のようにも、見えなくはなかった。

温もり（前書き）

始末人としての自分、それは変えられない事実。
けれど、
こんな自分でも、こんな事は許されるんだろうか？
あたし
は、妖怪である彼を、愛してしまった。

温もり

「まったく、ゆすらの奴。どこ行き…」

ブツブツとぼやきながら廊下を歩いてきた翡翠は、玄関先に、頭から足の先まで、ずぶ濡れのゆすらを見つけて息をのんだ。

「ただいま…」

泣きそうな彼女の笑顔に、翡翠の胸がひどく軋んだ。

「お前、どこ行ってたんだよ！散々搜したんだぞっ」

「うん、ごめん」

詰め寄った翡翠は、どこか遠くを見ているような彼女に、きつく、その柳眉を寄せた。

おかしい。

尋常じゃない、どうしたっていうんだ。

「どこ行ってたんだ？」

「ちよつと、ね…なんでもないわよ」

いくら尋ねても、虚ろに返してくる彼女に、ついに翡翠の我慢の緒が切れた。

「ちよつとって何だよ！散々搜したこつちの身にも…」

瞬間彼は、漂ってきた異臭に、顔を顰める。

彼女の、服に付いている黒い汚れは。

濃い、鉄の匂いがした。

「お前から…血の、匂いがする」

びくり、とゆすらの体がこわばる。

翡翠は、それを見逃さなかった。

「うん、妖怪を…殺したわ」

「ゆすら…」

翡翠が一瞬、手を引っ込めると彼女は、ひどく傷ついた顔をした。バテてしまった。

知られてしまった。

いつかバレルだろうとは、どこかで分かっていた。

けれど最近、楽しかったから、先延ばしにして忘れていたんだ。分かってたのに。

なのに…。

嫌われたくない。

彼には、知られたくないと思った。

「だから、言ったじゃない…あたしの、傍にいたら、必ず、後悔するって」

俯いたゆすらの頬を、幾筋も、涙が伝う。

「ゆすら、俺は…」

「触らないでっ！」

きつと自分は、彼を傷つけてしまうだろう。

嫌われるくらいなら、一人の方がいい。

その方が、痛みが少なくて済む。そう学んだ。

そつと、肩に触れた手を叩き払い、昂然と、ゆすらは翡翠を睨んだ。

「あたしは…アンタまで、不幸にしたくない！父さんも母さんも…

みんな、あたしのせいで…！」

ゆすらは泣き叫ぶ。

忘れもしない。

あの日の惨劇を…。

「だから、どうしてあたしに構うの！ほつといて…よ」

温もりを感じて、ゆすらは、やっと今の状況を理解した。

彼に、抱き締められていた。

「お前の泣き顔は、見たくねえなあ…俺、お前に会えたの、ちつとも後悔してねえよ？」

「離して」

「いやだ」

じたばたと身じろぐゆすらを、翡翠は、さらに強く抱き締めた。

「離して」

いくら突き放しても、食い下がる翡翠に、ゆすらの瞳にまた、涙が

溢れた。

「離すか!…俺は、どうなったっていい。お前を、放っとけねえんだよ」

「翡翠い…」

「一人で抱え込むな、辛かったら全部、吐き出しちまえばいい。俺が支えるから」

「え…?」

ゆすらは一つ、瞠目する。

あたしが怖くない、と言うのか、この男は。

妖怪なら、恐れるのが当たり前なのに。

「ホントに、あたしが怖くないのね?」

「ああ、だから…もう、泣くんじゃねえよ」

「つくしゅん!」

返事をしようとしたゆすらだったが、代わりにくしゃみが出てしまった。

「お前ツ、びしょ濡れじゃねえか!早く着替えてこいよっ」

「うん、そうするわ」

翡翠は、そっとゆすらを離してやる。

ヨロヨロと、自室に向かう後ろ姿を見送って、溜息をついた。

「さて、なんか食うかなー」

時間、事態に関係なく、翡翠は相変わらずマイペースだった。

居間で煎餅を片手に、茶を啜っていた翡翠は、肩に重みを感じて振り向いた。

ゆすらの頭が、乗せられていた。

「なした?」

「あつたかいね、翡翠」

擦りよってくる彼女が愛しくて、翡翠は、ふっと笑みをこぼした。

「お前が冷えすぎなんだってえの」

「こっしてると、なんか…安心するね」

そう言っつて、ゆすらは瞼をおろす。
だつて。

今まで、誰にも寄りかかったことなんて、なかったんだもの。
温もりが、こんなに心地よいなんて、忘れてたのよ。

「ごうした方が、もっと温かいんじゃないかねえか？」

「え

」

いつの間に、変わっていたのか。

すべらかな、毛皮の感触と、温みを感じて、うつうつとしていたゆ
すらは、慌てて顔を上げる。

本体：妖怪である、黄兔の姿に戻った翡翠が、そこにいた。

「翡翠……」

兎化した翡翠は、慰めるように、ゆすらの手に頬ずりをする。

「お前、いつも悲しい瞳めをしている。その悲しみを、俺は消してやり
たい」

「ずっと…覚悟してきたわ。誰も、好きにならないように」
怖れていたことが、起こった。

彼を、好きになってしまいたい。

けれどそうしたら、自分は戒めを忘れてしまう。

言っつたゆすらの頬を、また、涙が伝った。

「なぜ？」

なにも応えず、ただ涙を流す彼女に、翡翠は人の形に戻って尋ねた。

「悲しみを、増やさないためよ…あたし達の一族は、常に死と隣り
あわせ。一族といつても、あたしが、最後の一人なんだけどね」

涙を拭つて、ぽつりぽつりと、ゆすらは重々しく語りだした。

翡翠はきつく、唇を噛みしめる。

他の者はどうしたと聞くのは、愚かなことだ。

もう、分かりきっている。

どんなに辛かっただろう。一人だけ残され、詩の影に怯える日々が。

「死なせない」

「え？」

涙の、たくさん溜まった^{とびいろ}た鳶色の瞳が、翡翠をじつと見据えた。彼女の頬を伝う雫を、翡翠は玻璃のようだと思った。

「死なせねえ、死なせはしねえ…俺が、守る」

（ここに誓おう。俺は、お前を一人にはしない！）

瞬間、激しい脈動が彼女を灼いた。

ゆすらいの中で、記憶の糸が、一つの映像を結んだ。

（以前にも、同じ事を云った人がいた。守るから、と）
燃えさかる母屋。

まだ幼かった自分は、兄の腕の中で、その光景を見ていた。

『ゆすら、もう泣くな…父上と母上は、定めを全うしたんだ。いいかい、なにがあっても、泣いちゃいけない…状況は、俺たちを待っていてはくれないんだから』

『兄さま、兄さまも、定めを全うする？』

怖かった。

父と母を一度に失い、これ以上、泣くのが嫌だった。

『いつかは。だが今は、お前を守るよ。だから、もう泣くんじゃない』

『うう…』

年の離れた兄は、いつもあたしを守ってくれた。

あたしも、少しずつ戦術を教わりながら、兄と共に、妖怪達と戦った。

一族殲滅を、狙う妖怪も減っていき。

安穩に、10年が過ぎた。

いや。

安穩であるように、見せかけていたのだ。

妖怪達は、意外な手段で、兄を屠った。

あたしが18の夏

兄が死んだ。

交通事故だった。

荷物を積んだ、駐車中のトラックがつつこみ、即死。

出棺前に触れた、頬の冷たさが、今も忘れられない。
触れた頬は冷たくて。

白く清められた兄は、別人のようにきれいで。
もう、誰も失いたくない、と思った。

もう、誰も。

悲しい涙を、流さず済むように。

その日、定めと戦うと決めた。

あたしは、その日から始末人になった。

「やだ、やだよっ…独りにしないでっ、あたしを独りにしないでよ
お」

ゆすらは、翡翠の胸に顔を埋めて、声の限りに泣いた。

今まで押し込めていた思いを、全て、吐き出すように。

「泣きたいときは、泣くといい。俺が傍にいるから」

ポンポン、と幼子をあやすように、ゆすらの背中を叩いてやりながら、翡翠は言った。

「温かいよ、翡翠」

「おいコラ、鼻かめ…鼻！ほらティツシユ」

胸板に頬擦りするゆすらに、翡翠は慌ててティツシユを渡す。

「ありがと」

「独りにや、しないと思うぜ？だって俺、お前から離れるつもりないし」

心配するな、と伸ばした彼の手を、ゆすらは、するりと除けた。

唇に、柔らかな感触が重なる。

翡翠の目が、大きく見開かれた。

(予想不可能：女ってフシギだ。でも、嬉しいからいいや)

「好きよ、翡翠：あんたが、好き」

ゆすらの手が伸びてきて首にまわり、顔が近づく。

口づけを促すように、ゆすらが目を閉じた。

翡翠は初め、そっと触れるだけのキスをする。

抱き締める腕に力を込めると、ゆすらから甘い吐息が漏れた。

いとおしむように、深く口づけ合い、勢いが余って、二人一緒に床に転がっても、互いに離れることはなかった。

お客さん？（前書き）

靈感少女で、実は、妖怪始末人のゆすらと暮らすウサギ妖怪・翡翠。
相思相愛なのはいいが、翡翠の前に、留守中だった猫又・一牙^{かずき}が現
れた。ライバル出現か！？

お客さん？

生欠伸をしながら、台所に立つゆすらの背中を、翡翠は抱き締める。

「んもう、邪魔よ翡翠…兎にでもなつててちょうだい」

引き剥がそうとする、ゆすらの首筋に、翡翠はキスをした。

「ちよつと…ヤッ！」

「いーだろ別に。気にすんなよ」

「充分気になるわよ、早く離れてくれないと…また、数珠で縛られたい？」

にっこりと笑いながら（+青筋付き）、ゆすらは、エプロンのポケットから数珠を取り出す。

すると、翡翠は『わーん、ゆすらのいじめっ子！』と、のたまいながら、居間に避難していった。

やれやれ、である。

最近、少し疲れ気味なのだ。

居間に避難した、あいつのせいで。

はふ、と溜息をついてから、ゆすらは朝食の仕度を再開させる。

煮立ちかけた味噌汁を、ガスコンロから降ろし、火を消した。

その頃翡翠は、小型化してソファの上に転がっていた。

鼻の頭にシワを寄せ、ガジガジとテレビのリモコンを囓る。

どうやら、拗ねているようだ。

「ゆすらの奴、最近、なんか冷てえよ…なんでだよ」

じたばた、とソファの上で暴れる翡翠を、ゆすらはそっと抱き上げてやった。

「こーら…リモコンは食べちゃダメって、言ったでしょ？ゴハンよ」

「うー…」（まだ怒ってるらしい）

「なに怒ってんのよ、ゴハン冷めちゃうよ？」

「お前っ、最近冷たい！」

ぼんつ、と人の姿に戻った翡翠は、ゆすらに詰め寄った。

「寝不足だったのよ、ごめんね？」

「キライになっただんじゃ、ないのか？」

「まさか…へ〜んな翡翠」

「なっ、な…」

「ほら、早く食べなきゃ…ゴハン冷めちゃうわよ」

みごとに惚けた顔をした翡翠に、ゆすらは苦笑してしまった。

「悪かったな…疑って」

決まり悪そうに唸って、目線を、ゆすらから逸らす翡翠。

「やっぱりカワイイね、あんた」

「お前こそ」

「今日は忙しくなるわ、早く済ませちゃわないと、帰って来ちゃうしなだれかかってくる翡翠を、なんとか押し返しながらゆすらは微笑んだ。

「誰か、くるのか？」

おかずを頬張りながら、翡翠が尋ねた。

「ああ、うん…今日は一人だけだけだね。でも、アンタには…ちょっとマズい相手かも」

「そいつ、妖怪なのか？なにがマズいんだよ」

漬け物を囓りながら、言ってくる翡翠の仕種が可笑しくて、ゆすらはプツと吹き出した。

その仕種が、あまりにもウサギっぽかったからだ。

本人に言つと、かなりへこむので、それは心の中に留めておくことにした。

「ええ、今日帰ってくる居候さんは、一牙かすきついて行ってね、里帰り中…」

ゆすらは、そこまで言いかけて言葉を止めた。

窓の外に、本人の気を感じたからだだった。

翡翠は、ぎよっとベランダを凝視する。

窓の外にいたのは、赤毛の青年。

彼は、当たり前のようにベランダで靴を脱ぐと、ぶるぶると頭を振った。

「ひく…やっぱ日本は寒いなあ」

「だから一牙、いつも言ってるじゃない…ベランダから入ってこないでって」

「まあまあ、固いこと言いつこなし。たーだいまっ、ゆーすら」

「ぐえっ!？」

ゆすらが、一牙と呼んだ青年は、彼女の隣りに座っていた翡翠を踏んづけて、ゆすらの膝に甘えた。

一方、潰された翡翠は、その下で黒いオーラを発している。

「てーめーえく…ヒトを踏んづけやがって!ゆすらから離れろっ」

がばっと、起きあがった翡翠から飛び退いて、一牙は身軽に着地した。

「およ?ゆすらあ…誰だコイツ、2号さん?」

スリスリ、と懐く一牙を押し返しながら、ゆすらは溜息をついた。

「ヘンな言い方しない…誤解されるじゃないの」

「んなっ!」

翡翠は一瞬、言葉に詰まった。

一牙とかいう、この男。

なんていうか…。

いけ好かない。

「ってゆーか、お前が誰だよ!しかも、俺は2号じゃねえっ」

「ジョーダンよ、冗談!そんなくらいでマジになるなよなあ…頭カタイねえ」

「んな冗談、二度と言っんじゃねえ!」

へらへらと笑う一牙に、わなわなと拳を握る翡翠。

やれやれ、と首をすくめる一牙に、翡翠が食ってかかる。

見ていてまるで、そこだけコントのようだ。

実は、翡翠が相手じゃなくても、苦勞性なゆすらのだった。

「一牙、このヒトは翡翠っていつて、黄兔なの」

「へええ、新入りか」

一牙は興味ありげに、翡翠を上から下まで、じっくりとねめまわした。

「ふうん、黄兔ね…聞いたことあるぜ？俺も向こう（中国）の、^{シレイ}秦嶺出身だし。よろしくな、新入り」

「おう」

ぶすくれ顔で、一牙を睨む翡翠。

翡翠は、面白くなかった。

踏んづけられた上に（別に、痛くはなかったので、これはいいとして）、ゆすらの隣を取られたことが、なんとも腹立たしいのだ。

（こっちのが、かなり深刻だよ…）

しかも、この様子からして、たぶん居候はコイツだけじゃなさそう
だ。

^{ライバル}恋敵多し！

「はあ…寂しかったぜえ、やっぱ、お前の傍が一番だよ」

翡翠が、そんなことを悶々と考えているうちに、一牙は、ゆすらの膝に寝転がって甘えていた。

一牙の猫なで声に、ばちん、と翡翠の妄想が弾ける。

翡翠の頬に、青筋が浮いた。

「くつつくなくて言ってるんだろ！猫みてえにベタつきやがってっ」

一牙を引き剥がすと、翡翠は、強くゆすらを抱き寄せて、庇った。

「だって俺、猫だもん…お前こそ、ひつついてんだろ。お前さあ、ゆすらの何なわけ？」

面白そうに、にやつく一牙。

「おっ、俺はだな、てめーみてえなヤツから、ゆすらを守ってるんだ
よっ」

「ふうん、用心棒ってわけ。じゃあ、お前のモンて言うんじゃない
んだね」

まさに、口からでまかせ。

ウソ八百。

さらに墓穴を掘り進む翡翠である。

「ぐっ、そうだ…しっ、仕事だよ。邪魔すんじゃねーぞっ」

「さあねえ…俺さあ、気まぐれだし。猫だから」

なぜか力んだ翡翠を、更にかからかうように、一牙は悪戯っぽくペロリと舌を出して見せた。

「んなっ！」

「あー 冗談だつて冗談、まったく…すぐ頭に血が上る。落ちつきなよ、妖怪だったら、誰だつて寄りたくもなるさ。ゆすらの旨そうな気に惹かれてなあ。お前もそのクチだろ？」

悪びれずに言う一牙に、翡翠は息を詰まらせた。

無意識ながら、傍に感じた安心感は、彼女の濃く、強い靈気のせいだと、今になって分かったからだった。

「お、お前だつて、そうじゃねえのかよ！」

全くもって面白くない翡翠は、一牙に噛みついた。

「お前だつて、ゆすらの傍にいるじゃねえか！なんか、狙いがあるだろ！？」

一牙は、くっ、と失笑すると、肩を揺らして、大笑いし始めた。

「なっ、なにが可笑しいんだよっ！」

カツとなり、翡翠は怒鳴る。

「失礼、あんまり可笑しかったんでね。だけど…もの言いに気をつけな、ガキが」

翡翠の背中を、一筋、冷たい汗が伝った。

一牙から、殺気にひどく似た、苦い気配を感じたからだ。

「狙うなんて、とんでもねえ…俺は勿論、他の奴らも、みな昔から神崎一族を護ってたんだ、分かったか。解ったなら…もう余計な詮索はナ…シ」

「へ？」

急に表情を崩した一牙に、翡翠は拍子抜けしてしまった。

なんだ、コイツは。

やっぱり、よく分からん…。

猫は、キライだ！

「ゆるすら、俺が全部護つてやるからなあ」

(ブチッ…)

台所を片付けている、ゆるすらの背中にぶら下がっている猫一牙を見た翡翠に、本日、いくつ目の青筋が浮いた。

「ありがと、でもね一牙…プライベートまでは遠慮するわね？ちやんと間に合ってるし」

ねっ、とゆるすらは翡翠にウインクする。

そんなことで納得(満足?)してしまう、単純な翡翠なのだった。

「ちえー…つれねえの、誰だよそいつ、うらやましいヤツ」

猫一牙は、不機嫌に尻尾を振ると、階段を昇っていつてしまった。

「やれやれ…翡翠、まだ怒ってるの?」

「俺、あいつキライだ…いけ好かねえ」

黄兔に戻った翡翠は、背中の毛皮を逆立たせていた。

ゆるすらは、おいで、と手招きをして、寄ってきた翡翠の首を、優しく抱き締めた。

「ゆるすら?」

翡翠は動揺したらしく、耳を細かに痙攣させる。

「いい?翡翠…あたしが好きなのは、アンタだけよ?特別ってこと、分かるわね?」

「お、おう…」

潤んだ鳶色の瞳に見つめられ、翡翠は戸惑った。

いつもの彼女と、なにか雰囲気が違う。

なんというか、濃厚な色気があるような。

ちよっと、やばい…かも。

「ふかふか…あつたかーい」

どうやら、そんなことを考えた(妄想した)のは、自分だけだったらしい。

「ぐっ、苦し…」

ゆるすらは、ぬいぐるみを抱くように、翡翠を抱きすくめた。

「おつきな、ぬいぐるみみたいー…かわい〜」

可愛がってくれるのは嬉しいが…これでは、まるでペットだ。

『もっと別な形で、可愛がってくれると嬉しい』などと、不埒なことを考えているバカが、ここに一匹。

「放せゆすら…苦しいぞ」

「やだー」

「死ぬって、コラ…」

「ウソつけ」

「ウソじゃねえって、放してくれよお…」

結局その日は、ゆすらの枕になって終わりだった。
なんの、進展もないままで。

部屋に戻った翡翠は、深く溜息をついたのだった。

(まあいい…じっくり、のんびり行かせ)

そんな小雨降る、秋の夜更けのこと。

お客さん？（後書き）

こんにちは、維月十夜です。『のんびり行こうよ？』新章のお届けです。
ここまで、読んでくださった読者様方、感謝です。
それでは、ゆすらと翡翠の恋模様を、お楽しみくださいな

あわや！（前書き）

靈感少女で、妖怪始末人の彼女・ゆすらと甘い生活を送っている翡翠。
帰ってきた居候・猫又の一牙も加わってちよつと一波乱のご様子。さらに、ゆすらの（数少ない）人間の友達が遊びに来ることになって!？

あわや！

今日のゆすらは、なんだか忙しそうだ。

掃除機とやらをかけたari(床に寝ていて、2度ほど轆ひかれたが。)
窓を拭いている。

「なあ、誰か来るのか？」

窓を拭いているゆすらの膝に、小型化した翡翠が、ちょこんと前肢を乗せた。

「友達が来るのよ…ここ最近、掃除サボってたから、やりごたえあるなあ」

腰を擦なするゆすらに、翡翠は人の姿に戻った。

「友達つて、人間のか？」

言われて、ゆすらは一つ瞠目した。

したが、職業柄、人間より、妖怪の知り合いの方が多いので、特に気にはしない。

「そう、綾子っていうの。旅行の時に一緒にいた子よ」

翡翠は臍おへそに、ゆすらがあの時、人を待たせていると言っていたのを思いだした。

「ああ、あの時のな」

「で…お願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

「願い？」

嫌な予感に、翡翠は小さく身震いをしたのだった。

「なんでだよ、フツの兎のふりしろって…無理だって！」

「お願いよっ、だってビックリするでしょ？ペットは喋らないの。
インコか鸚鵡おつむ以外はね」

「じゃ、念話ならいいか？よっぽど鋭いやっじゃねえと聞こえない」
不機嫌に、鼻の頭にシワを寄せる翡翠を、ゆすらはそっと撫でてやる。

「ええ。悪いけど、そうしてちょうだい」

「仕方ねえなあ、じゃあ報酬は…」

言った瞬間、唇に柔らかな感触。

啄むつばような優しいキスに、翡翠は、目を剥かずにはいらなかった。

「これで、どう？」

へたり込んだ彼を抱き締めて、悪魔的に、ゆすらはにっこりと微笑んだ。

「…分かったよ」

彼女の腕の中で、翡翠の姿が歪む。

小兎になると目を閉じ、スリスリとゆすらの胸に甘えた。

「っか」

「っこの、どスケベ…」

どこからか聞こえた一牙の声に、翡翠は慌てて飛び起きた。

「なっ…てめえ、見んじゃねーっ」

赤毛の子猫になっている一牙は、テレビの上に寝そべりながら、翡翠を茶化す。

もしその時、翡翠が人型だったなら、やかんの様にまっ赤になっているだろう事は、ほぼ間違いないだろう。

「ゆすらも、なーんで…こんなガキがいいのかねえ」

「るせえっ、年増は縁側で伸びてろってんだ！」

翡翠も、負けじと背中の中を逆立てて毒を吐く。

「おう、やんのか？ガキンちょ…」

ぎゃいぎゃい、とやかましい二匹。

犬猿の二匹を放置しておいたら、どんなことになるか分かったものではない。

「ああ、こら…やめなさい、二人とも。翡翠もね、いい子だから」と、ゆすらが二匹を止めた瞬間、同時に呼び鈴が響いた。

「おでましまいたいね。は　　い！」

「う」

「

翡翠は、鼻の頭に最大級のシワを寄せていた。

なにを隠そう、不機嫌なのだ！

ゆすらの友人（綾子とかいうヤツ）は、どうやら無類の動物好きのようだった。

こっちが疲れるほど、執拗しつように構ってくるのだ。

「あら、ウサちゃんがいる！だっこしてもいい？」

綾子は手放しに喜ぶと、翡翠を抱きあげた。

「うん、この子、翡翠っていのよ？」

（怒ってるわね、大丈夫かしら？）

ゆすらは内心、一人ごちる。

（ウサちゃん！ウサちゃんだつてよー…ああ、腹いてえ）

テレビの上で笑い転げる一牙に我慢できず、翡翠は前足で、シッシツという仕種をした。

（うるせえな、バカ猫…どっか行きやがれ！）

「プフっ…」

「おとなしいねえ、よしよし…」

いきなり、ムギユウウ、と頬を寄せてきた彼女に、翡翠は慌てて顔をそむけた。

（ぶへっ…オイゆすら、コイツ、なんか臭え！鼻につーんときたっ）
花か、なにかとも異なる臭気が、翡翠の小さな鼻を灼いた。

内心、早く離して欲しい、と切に願う翡翠である。

（ゆーすーらー…早くどうにかしてくれ、鼻がもげる）

「あ、綾子…翡翠、そろそろ返してもらってもいい？」

ゆすらが、助け船を出して受け取った翡翠は、心なしかぐつたりしている様だ。

「うん、またね、翡翠ちゃん」

名残惜しげに、綾子は翡翠を一撫でした。

（ちゃん、じゃねえっ…俺あ男だ！）

床に降りしてもらった翡翠は、念入りに、身繕いを始めた。

「嫌われたかな？」

「ううん、大丈夫。あの子、人見知りするのよ」

ははは、と軽く笑って誤魔化すが、翡翠の視線が痛い。

(怒ってる、すっごく怒ってる…)

「そっか…」

なにか、寂しげな雰囲気になってしまったので、ゆすらは急に素っ頓狂な声をあげた。

「あ、ちよつと待ってて…あたしったら、お茶も出さないで。淹れてくるね？」

ぱたぱた、と台所に走っていったゆすらを見送って、綾子は、足元に寄ってきた猫一牙を抱き上げた。

「ねえ、ゆすら…なんか変わったよねえ？」

一牙は、にやあと鳴いて、曖昧に相槌をうってやる。

『それは、俺にも分からねえ』と、左右色ちがいの瞳を、三日月の形に細めて見せた。

「一牙と、なに話してたの？」

蓬色ひよこの湯飲みにお茶を注ぎながら、ゆすらは上機嫌に尋ねた。

「二人だけのナイショ。ねっ、一牙」

困ったように、ぶみやあ、と鳴いた一牙には、後でたっぷりと事情聴取を受けてもらうことにして、ゆすらは『そう』と笑みを返した。
「そうそう、ゆすら…サークルの話なんだけど、あんまり顔出さなくなっただじゃない、どうしたの？」

テーブルの下でぶすくれていた翡翠は、どうも話について行けないようで、頭には無数の、クエスチョンマークを浮かせている。

(さ、さあくるって、なんだ?)

「バイトとか、最近忙しくてね」

(誤魔化し、きくかしら…)

内心、またもハラハラしたが、これも通ったようだ。

「そうなんだ、ここだけの話なんだけど、アンタ、結構モテてたじゃない? ほら、あの…え〜っと、なんていう名前か忘れたけど、サークルの男連中の中で、アンタに気があるってヤツ。そいつに、昨日しつこく聞かれちゃってさ…」

(ぬぁにつ!？ゆすら、本当かつ)
勢いよく起き上がった瞬間、すこんつ、とテーブルに頭をぶつけた
翡翠は、危うく声を出しそうになり、なんとか、鼻を鳴らしてその
場を誤魔化した。

(ぬおおお つ、俺という男がいるつてのに〜つ)

テーブルの下で、頭を抱えて苦悩する翡翠だが(一見には、痛がつ
ているように見える。)、ゆすらの一言に、ぴたりと動きを止めた。
「困るわ…それに、余り憶えてないのよ。誰がいたかなんて」
「代わりに、断つところか?」

「ええ、そうね、お願いするわ」

うるうる、と大きな瞳を潤ませる翡翠。

まったく、現金なものだ。

ほっ、と安心した様子のゆすらに、綾子は、にんまりと笑った。

「アンタの好きな人つて、どんな人?」

「えっ、なっ、なんで?!」

まさか、聞かれるとは思っていなかったのだ。

ゆすらは、酸素不足の金魚のように、口をぱくぱくさせた。

「分かるわよう、それくらい…アンタを見てればね。なんか雰囲気
が変わった、柔らかくなつた、っていうのね」

そろそろ、とテーブルの下から出てきた翡翠が、グイグイとゆすら
の腕の中に頭を押し込む。

居ずまいを整えると、幸せそうに目を細め、ペロペロとゆすらの頬
を舐めた。

(ここにいるだろ?ここに…)

「そうね、我が儘で、口が悪くて、態度もでかくて…」

彼女の言葉に、少なからずめり込む翡翠。

「でもね、好きなの」

「こりゃ、かなり重傷だわね…」

うつとりというゆすらに、綾子は呆気にとられる。

しかし、少し違和感を感じて、綾子はゆすらを見た。

(この子の想い入って、まさか…)
いや、正しくいうなら、ゆすらに熱烈なキスをしている翡翠をだ。
彼女といて、平気な男がいるだろうか？

失礼な考えだが、見えないモノが見える彼女なら、あり得ないことではない。

なぜか、こういう『カン』だけは鋭い綾子である。

「それって、まさか…この子？」

綾子は、翡翠を指さす。

がちんつ、と一気に石化するゆすら。

翡翠は相変わらず、熱烈なキスをくり出している。

石化したが、なんとか持ち直し、誤魔化し通すことに成功した。

「やあだ、なに言い出すかと思えば…この子は、あたしに懐いてるだけ。好きな人は、別よ」

「そう…？あんなのことだから、てっきりその子が妖怪で…とか言うかと思って」

「なに言ってるんのよ、もう」

(うーん、さすが…鋭い、全部あってるわ)

誤魔化すことに精一杯で、違う意味で目を潤ませている翡翠に、ゆすらは気づかない様だった。

綾子が帰った後、一番苦労したのが、拗ねた翡翠のフォローだった。
た。

「どーせ俺なんて…」

とか何とか…。

始終、夜のベッドの中で咳かかれては、堪ったものではない。

「も…だから、ゴメンって言ってるじゃない」

「すげえ、傷ついたんだけどなあ…」

。子供のように聞き分けのない彼に、泣きそうになる(すでに半べん)

「も…いい加減にしてよお」

翌日、ゆすらは、腰痛で起きあがれなかったという。

人生…楽あれば、苦あり。

ここは一つ(どつ)いう数え方だ…(、のんびり行きましょつや？

あわや！（後書き）

こんばんわ、維月十夜です。
読者様方、ここまでご苦労様
です。
今回の『のんびり行こうよ？』ちよつと翡翠×ゆす
らの、なにげに18禁ぽくなってしまいました…。
知識も
ないクセに、稚拙ですう（―）
こんな作者でもよろし
ければ、今後ともよろしくです。
それでは、失礼致します。

蠢動

蒿里こうりの麓ふもと。

青い釉薬うわくすりの瓦が美しいそれは、傲然じうぜんとそびえていた。

蒿里とは、中国が靈山・泰山たいざんの西側に位置する、同系列の靈山だ。

蒿里の麓にそびえる、館の一室。

そこだけ光が入らぬように、部屋全体に、闇色の布が張ってある。

一人の男が、掌てのひらに握った水晶球を覗いていた。

水晶球に映るのは、人間の娘と口づけあう息子・翡翠の姿。

「あいつめ、あくまで戻らぬつもりか！」

ビクリ、と男が身じろぐと、琥珀色の絹糸が流れて、外套マントの様に背中をおおった。

ぱりん、と握りしめた水晶球が、光を撒いて砕ける。

「目障りな。人間など…っ」

「お館さま…あたくしに、お任せくださいな」

憤然と吐き捨てた彼の背に、鈴を転がしたような、甘い声があった。

「朱明シュミンか…」

お館さま

翡翠の父・瑞慶ずいけいは、ニヤリと笑った。

「して、どうする…あいつを連れ戻すとても申すか」

「いいえ、逆でございます。少し、座興を思いつきまして」

ほっそりとした、柳腰の美女・朱明は、くすりと含み笑った。

「ほう…座興とな、おもしろい、申してみよ」

「はい」

「っしゅん！」

夜明け頃、なぜか目が覚めてしまったゆすらは、悪寒を感じて、きつく自身を抱き締めた。

「こんなに不安なのは、どうして？」

翡翠との関係が深くなる度、心にざわめくモノが生まれるのだ。

すぐ隣で、寝息を立てている彼を起こさないように。
ゆすらは、そっとベッドを抜けて身支度を整えた。
なにかが
動きだした。

これは勘だ。
自分には分かるのだ。

始末人としての、本能がそう言っている。

ゆすらは夜明けの薄闇に溶ける、黒い外套マントを纏い、刀を佩はいた。

「お嬢様：先刻から、屋敷の周りをうろつく輩がおります。獣の気配のようですが…いかがなさいますか？」

玄関に立つ彼女の、足元の影が膨れあがると、青い双眸を持つ黒い顔が、ゆらりと起きあがった。

ゆすらの影の中から現れた、彼の種属を闇鬼やみおにという。

彼は、一牙を始め、古来より、神崎一族に忠実に仕える妖怪だ。

普段は、床下に潜んでいる。

「行く…隼人、お前もきてくれ」

「用心のためです…仰せのままに」

にこり、と穏和に微笑むと、隼人は影に溶けた。

ゆすらの顔つきが、一瞬にして変わる。

闇鬼である、隼人が憑依したせいもあるが、彼女の鋭い眼差しは、

始末人として元々のものだ。

「こうなった上は、定めを果たさねばならぬ…」

言っただゆすらの声は堅い。

それだけの意志を、秘めているからだ。

「やれやれ…こんな極東の島国まで来るほど、あたしはヒマじゃないのにねえ」

大門の屋根に、小鳥のように留まっていた朱明は、剣呑にゆすらを見下した。

「貴様、何者だ」

一触即発な気配に、ゆすらは刀の鍔口つばぐちを浮かせて、低く構えた。

「おやおや、強気なこと…あたしは朱明。ふうん…お前が翡翠君の女か」

フン、と鼻で笑われ、カツとなったゆすらは、朱明の足元を払った。しかし朱明は、ふうわりと身軽に斬撃を除けて、飛びのいた。

彼女は、決して親しみを込めて翡翠を呼んだのではない。

君、とは身分の高い者への敬称なのだ。

「なにが目的か！話によつては、容赦はしないぞっ」

「おや、まあ…それじゃあ話が早いね」

瞬間、乾いた音と共に、ゆすらの刀が弾き飛んだ。

「は、早いつ！」

目に留まらぬ早さで、いきなり朱明は、ゆすらとの間合いを詰めた。

「刀を使うなら、もっと手際よくななくちゃ…」

朱明の手が、ゆすらの首を掴み上げる。

女の細腕なのに、万力のようにぎりぎりど、ゆすらの喉を締めあげた。

「ゆすらっ、ゆすらを放せ！」

「翡翠！！！」

玄関から、飛び出してくる翡翠の様子が、ゆすらにはスローモーシヨンの様に見えた。

「朱明っ！？ゆすらを放せっ」

駆けつけた翡翠は、遠巻きにしか近づけないことに歯がみをしながら、必死に叫んだ。

「やっとお出ましかえ？翡翠君、アンタに直接恨みはないけれど…」

これも、お館さまのため！」

朱明の左手に雷いかすちが集まり、それは急激に膨張しながら、ゆすらへと放たれた。

翡翠の、目の前が白く染まる。

彼の中で、警鐘が鳴った。

逃げる、逃げてくれ！

ゆすら、逃げる！

お願いだからっ。
ただ、それだけを。

くり返し、くり返し叫び続ける。

雷を帯びた彼女は、まるで、枯れ葉の様に宙を舞った。
翡翠の頬に、鮮血が散った。

「ゆすら つ、ゆすら!？」

「触るなっ!」

崩れ落ちた、ゆすらに走り寄った翡翠に、朱明は牙を剥いた。

「この娘の命が惜しくば、追ってくるがいい! できればの話だがな。
この娘: あたしが貰ったっ」

朱明は、小山ほどの赤兎に変化すると、ゆすらを銜^{くわ}えて消えた。

「ゆすら!？朱明、貴様
!」

(何をするつもりだ、朱明: くそ、俺がついていながらっ)

地面にへたり込んだ翡翠は、襟首を引つ張り上げられて、やっとその気配に気がついた。

「ゆすらの気配が消えた! この血の匂いはどういう事だ!? 聞こえてんのか、このクソ兎! その耳、引きちぎるぞっ: 説明しろっ」

「一牙: ゆすらが、ゆすらが、連れてかれちまった!」

弱々しく言った翡翠に、カツとなった一牙は、翡翠を思いきり殴り飛ばした。

「てめえの仲間か!? お前と同じ匂いがしやがるっ、てめえさえこなけりや: 出逢わなけりやあ」

「ゆすら、俺のせいで: あんな事になるなら、出会わない方がよかつたのか?」

血まみれの彼女を思い出し、再び瞳に涙が溢れる。

蹲^{つまず}った翡翠は、まるで、迷子になった子供の様に声を上げて泣いた。
止めどない、自責にかられて、翡翠の喉は嗚咽を漏らす。

「チッ: これだからガキは。ゆすらは必ず連れ戻す! 例え、この命消えようともさ」

「へ?」

鼻を噉って振りむいた翡翠に、一牙は額を抑える。

「分かんねえヤツだな…だからもう、ぴーぴー泣くんじゃねえ！協力してやるって言ってるんだよ」

ぶつきらぼうに言っで一牙は、ばしんっ、と翡翠の背中を叩いた。

「って…一牙」

「協力つても、ちつとただけだぞ！てめえら黄兔の領域テリトリーに、俺は行けねえからな」

「すまねえ…俺、絶対ゆすらを助けるよ」

ぷいっ、と背を向ける一牙に、翡翠は目尻を下げた。

「当たり前だ、もたもたすんなよ？ガキンちよ、こっとなったら急がば回れ、行くぞ！」

一牙は、地面に左手を置くと、目を閉じて気を集め始めた。

時空路じくうろを開いているのだ。

時空路は、ごく稀に使用することができる人間がいるのみで、その

主は、妖怪が使う術なのだ。

またの別名を『鬼門遁甲きもんとうじょう』という。

「一牙」

「あん？」

「借りができたな」

背を向けたまま言った翡翠に、一牙は怪訝な返事を返した。

「ばかやるうが…倍にして返しやがれ」

深闇の中に、道がある。

彼らには、本能で判るのだ。

それが、時空路。

一牙は、開けた入り口が閉じるのを感じて、後ろを振り返った。

蠢動（後書き）

ども、維月です。
読者さま方、ここまで、ごくるうさまです。
翡翠とゆすらの恋模様…。
一筋縄ではいきませんね。（笑）
自分で言うのもなんですが。
それでは読者さま方、次回、どうなるのかご想像ください？
展開に、乞うご期待！
それでは、失礼致します。

幻惑（前書き）

恋人・翡翠と引き離されたゆすらは、強敵・朱明の術中に陥っていた。
灵感少女で、始末人の神崎ゆすらと、態度がでかくて、口の悪いウサギ妖怪・翡翠の珍道中（ラブコメ風味）。

幻惑

どこまでも、見たたす限りの黒い世界。

ゆすらは、一条の光も届かない、闇の中にいた。

「ここは、どこ?」

問いかける声は、響きもせずに、くるりと虚空が吸い込んだ。

「翡翠…」

ぼつり、と呟いて座り込んだゆすらは、急に人の声を捉えて、慌てて立ちあがった。

「声が…!」

しかし、ゆすらは、その目を大きく剥くことになる。

「ねえほら、見てよ…来たわよ、例の『靈感少女』気味悪い」

「あの人って、気さくだけどさ…なんか暗いよね」

「そうそう、なんていうか…あれ、近寄りたたってヤツ?」

「そういえば、あの人…天涯孤独らしいよ?」

「うそ、マジい?それ」

「うん、らしいね…友達が同じサークルでさあ」

ゆすらの前に現れた人影は、大学のクラスメートである、数名の女子だった。

ああ、そうだった…。

急速に、ゆすらの表情が、翳^{かげ}っていく。

陰口。

冷たい視線。

やはり、自分たちとは違う者を、人間は攻撃・および隔離する。

そんなもの、もうとっくに慣れたはずなのに。

なのに。

凍えてしまいそうだ。

次第に、声同士が重なり合い、よく聞き取れないノイズとなって、ゆすらに迫る。

怖れ。

不安。

好奇心。

妬み。

嫌悪。

さまざまな念が、黒い炎となつて、彼女をあぶり出した。

無数の目が、ゆすらを見る。

ゆすらは、走り出した。

走つても、いくら走つても途切れることのない、永劫の間。

転んで、つまづいても。

立ち止まっているヒマはない。

無数の目は、ざわざわとノイズを伴つて、追いかけてくる。

もう、逃げられない。

彼女が足を止めた瞬間。

目の前の足場が、突然に消えた。

「…ああっ!!」

落下していく体。

どこまでも果てなく墜ちて。

このまま、終点に叩きつけられるのか。

きつく目を閉じた刹那、彼女の背中は、固い地面の感触を捉えてい

た。

一つ、瞠目をする。

闇に慣れた目が、そこに、見慣れた人影を映した。

目の前に、翡翠がいたのだ。

彼女の表情が、嬉しさに染まった。

「翡翠！来てくれたのね、よかったあ…早く、うちに帰り」

ゆすらの言葉が、そこで途切れた。

抱き締めるゆすらを押し返すと、翡翠は背中を向けたのだ。

「ひ、すい？」

「触るな人間！」

冷たく、殺気のコもった彼の双眸そうぼうに、ゆすらは凍りついた。

「冗談よね？翡翠…お願い、こっちを向いて」

しがみついた彼女の頬に、一条の傷が生まれ、鮮血が飛び散った。

「そんな…翡翠！」

叫ぶゆすらを、ちらりともせず、翡翠は抱きついてきた、別の女の背中に腕を回す。

「いいのかい？翡翠、あんたを呼んでいるようだけど」

女が、三日月形に目を歪ませて、ニイ、と笑った。

「別に。あれは人間の女。俺を置いて、遠からず去ってしまうものだ…。俺はそんなものより、同族のお前の方がいい」

「そうかい、やっと、わかってくれたんだねえ」

儼然と言った翡翠に、女は華やいだ声で応える。

今までなら、自分が、翡翠の腕の中にいたはずなのに…。

その女の、勝ち誇ったような笑みは、ゆすらの自信を叩き割るのに十分な威力を持っていた。

「どうして？」

ぼつり、と言ったゆすらに、女・朱明しゅみんは、ケタケタといやらしく嗤わらう。

「どうして、だって？アンタ、自分をよく見てみな。血まみれじゃないか。ああ…おぞましい。その手で、いくつ命を狩ったんだい？翡翠はねえ、そんなお前の正体に嫌気がさしたんだよ。そんなことも判らないのかい、このケダモノが！」

ゆすらは、戦慄せんりつした。

清潔だったはずの服は、黒く血に染まり、両手は勿論、頭から足のつま先まで、血で濡れていたのだから。

「ああ…そんな、翡翠」

涙の溜まったゆすらの瞳は、翡翠だけを見ていた。どうして。

ドウシテ、みんな、アタシヲヒトリニスルノ？

新たに、涙の盛りあがったゆすらの視界の端で、一際、濃い闇が膨らんだ。

「さあ…お前たち、目の前にいるのは、お前たちをそんな目に遭あわせた女だよ。存分に、いたぶっておやり」

ゆすらは、妖艶に嗤わらった朱明から、必死に後じさる。

「翡翠、翡翠！行かないでっ、あたしを独りにしないで!？」

声を限りに叫ぶ彼女に、闇が、覆い被さってきた。

肉が食いちぎられて。

あかい、赤い血がしぶく。

鋭い牙に、爪に腹を裂かれ。

内臓そしやくが引きずられて、咀嚼そしやくされる。

悲鳴を、あげる間もなかった。

「っ!?!」

ゆすらは、永劫えいこくの闇の中で、声にならない断末魔を上げ続けた。

幻惑（後書き）

こんばんわ、維月です。 < b r > 『のんびり行こうよ?』の11部
のお届けにまいりました。 < b r > 翡翠とゆすら、ただ今引き離さ
れてます…。 (汗) < b r > ええと、朱明、彼女はどうしましよ
うか…。 < b r > 妖艶な彼女は、かなりしたたかな女ですよ。 < b r
> わが子達の中でも、かなり濃いキャラですね。 < b r > 翡翠と、
ゆすらのラブコメディー、これからもしよければこの先もおつき
あいくださいますよう、お願い申し上げます。 それでは、ごゆるり
と、ご賞味くださいな

片恋（前書き）

翡翠と引き裂かれ、朱明に攫われたはずのゆすらは……。
翡翠の弟、青蘿せいらに保護ほごされていた。
健気けんきなゆすらに触れるうちに、青蘿は、彼女に想いを寄せ始めていた。
ゆすらは無事に、翡翠と再会することができなのか!?
靈感少女・神崎ゆすらと大食らいで、口の悪い。だけどなぜか憎めない、ウサギ妖怪・翡翠との珍道中。

片恋

「いやああ

!?!」

びくりと背中がのけぞり、ゆすらは目を見開いた。
汗だくだった。

体中から、冷や汗が噴きだしている。

五体を引き裂かれる恐怖が、ゆすらの中に鮮明に蘇った。

「夢…よかった、夢で。あたしは、妖術にかかっていたのか」

一言、一言、自らに言い聞かせるように、ゆすらは重く呟いた。

「それにしても、なんていやな夢…」

額を押さえて呟いた瞬間、聞きなれた声を聞いて、ゆすらは声の主を凝視した。

「気がついたみたいだね、よかった」

にこりと笑った青年は、翡翠と瓜二つだったのだ。

「ここは？翡翠とそっくりな、あなたは一体」

起きあがるうとしたゆすらは、眩暈を感じて、再びベッドに身を沈ませた。

「ずっと、彼を呼んでいたね…翡翠を知っているの？」

「ええ…よく、知っているわ。ここは、どこ？」

翡翠と瓜二つのせいもあり、ゆすらは警戒を解いていた。

「ここは華山の麓・広寒宮。俺は青蘿、翡翠の弟だよ。あなたは？」

華山とは、五神山の一つで、神・神仙の土地だ。

その主・西王母の膝元。

黄兔は、西王母の臣なので、その領域を住まいとしているのだ。

「あたしはゆすら、神崎、ゆすら」

「ゆすら、きれいな響きだね。あまり無体をしない方がいい…ずっと眠ってたんだ」

「どのくらい？」

「十日ぐらいかな…朱明が、血だらけの君を銜えてきたんで、慌て

て取りあげたのさ」

朱明、と聞いたゆすらは震えた。

「彼女には、俺たちも困ってるんだ…でも安心して？あいつは、ここに入ってこられないから」

「どうして？」

人懐っこく笑った青蘿に、ゆすらの中に凝っていた塊が、静かに、ゆっくりと溶け始めた。

「結界だよ、あいつだけに聞く術が施してあるんだ」

「…ありがと、助けてくれて」

ゆすらの頬を、つう…と涙が伝った。

「なっ、泣かないでっ…どこか、苦しいの!？」

急に泣き出したゆすらに、青蘿は狼狽する。

ちがう。

辛いんじゃないんだ。

安心、したんだ…彼の優しさに。

暖かい。

ゆるゆると頭を振ると、ゆすらは軽くむせた。

「大丈夫？まだ無体はいけない。さ、横になって…水を持ってこようね。すぐ戻ってくるから」

にこ、と微笑んでから踵を反した彼に、翡翠の面影が重なる。

彼が行ってしまっただけから、ゆすらの頬を、また涙が伝った。

翡翠…。

翡翠は、一体自分を見て、どう思っただろうか。

幻滅されていたら、どうしよう。

もし、そうなってしまったなら、自分は、そう簡単には立ち直れないだろう。

何があっても、傍にいたと言ってくれた彼を信じたい。

もう、一人にはなりたくなかった。

(術中に嵌るなんて、なんと無様な…しかし、どうしてこうなった

か、だ)

ゆすらは深い溜息をつくど、ゆっくりと瞼を閉じたのだった。

ゆすらは、少しずつ元の気力を取り戻していた。

まだ、一人にされると怯えたが、今はそれも薄まりつつある。

ゆすらが、青蘿の広寒宮にきて、あつという間に三月が過ぎていた。広寒宮、とは月の異称。

見わたす城内の壁や調度品、全てが白磁や、漆喰でできていた。さすが月というだけあって、全てが白や銀で統一されている。

「うう…ん」

ゆすらは、すぐ傍に気配を感じて、目を覚ました。

目を開いた瞬間、青い瞳に思いきりぶつかり、慌てて飛び起きてしまった。

「きゃ！」

傍にいたのは、青い目の、銀の兎だった。

しかも、標準よりかなり巨大な。

「様子を見にきたんだけど…脅かしちゃった、かな？」

銀兎が青蘿の声で話し始めたので、ゆすらは、ぱちくりと、一つ瞳目をした。

「青蘿、なの？」

「うん、起き抜けにあっち（人間）の姿でいたら驚くと思って、この姿で来てみたんだけど、逆だったみたいだね」

ペロリと舌を出しておどける彼に、ゆすらはくすくすと笑った。

「優しいのね、ありがと」

そつと頭を撫でたゆすらの手に、青蘿は嬉しそうに目を細めた。

「照れるな…。あ、具合はどう？痛いところはない？」

「大丈夫よ、おかげさまで。青蘿のくれた仙水は、よく効くわね」

青蘿は嬉しそうに、一度ぴょんと跳ねると、人の姿になる。

「ねえゆすら、庭に出てみない？」

華奢な、ガラスの小瓶に入った仙水を飲んでいたゆすらに、青蘿は

そつと誘いかけた。

「庭、があるの？」

「行ってみるかいい？」

彼は、あくまでも強制はしないつもりのようなようだった。

「ええ…見てみたいわ、連れて行ってくれますか？」

そう答えたゆすらに、ぱああ…と明るくした青蘿。

兄同様、まだ幼さを残す横顔に、ゆすらは見とれた。

「こつちだよ、ついておいで」

白い廊下を抜けて、同じような作りの建物の中を、やっと通り抜けると急に、視界が開けた。

「ここが、俺の庭。いくらきれいに整えても…一人で見るのは、どうにも味気なくてね」

本当に嬉しそうに笑う青蘿に、ゆすらは口元をほころばせる。

よく刈りこまれ、手入れされた庭。

泉が沸いて、魚が遊び。

さまざまな花が、咲き乱れては芳香を放ち。

果樹は、たわわに成った果実に、枝をしならせている。

「きれい…まるで、楽園ね」

ゆすらは、うつとりと目を細めた。

青蘿は、そんな彼女に、淡い想いを寄せ始めていた。

兄の恋人とは、分かっている。

これは、してはいけない事だ。

そんなこと、とつくに分かっているのに…。

俺、彼女が好きだよ。

傷つけたくない。

だけど、きつと俺は…彼女を傷つけるだろう。

どうしたらいい？

どうすれば、彼女は泣かなくなるんだろう？

「ずつと、ここにいない？」

風が、ひとしきり木々を揺らしていく。

青蘿と、ゆすらの髪が、しなやかに風に遊んだ。

「嬉しいけど、それは無理なのよ…あたし、人間なもの」

ふと、悲しそうに表情を崩したゆすらに、ちくりと、青蘿の心が揺れた。

時が

違いすぎるのだ。

人間にはあって、翡翠にはないもの。

それは、時間の限界。

変えられない、事実。

やはり、身の程知らずだったんだろうか？

でも、それでも、あたしは翡翠を愛している。

一緒にいられるときが違っても、いられるだけ、傍にいたい。

お願い、神さま…。

彼を、愛せる勇気をください。

「泣かないで、ゆすらは…兄さんのことで苦しんでいるのに、ゆすらを苦しませる兄さんなのに…それでも、ゆすらはあいつが好きなのか？」

顔をあげると、青蘿に、きつく抱きすくめられていた。

「アイツね、あたしが怖くないって、言ってくれたの。始末人のあたしなのにね…。態度がでかくて、口も悪くて大食らい…でもね、そんなアイツが、あたしはどうしようもなく好きなのよ」

「始末人、って？」

「害をなしたモノを、人知れず始末するのよ。たくさん、たくさん殺してしまった」

この身に浴びた血は…消えずに、心の奥底にこびりついて離れない。ゆすらは、無意識に拳を握りしめる。

「ゆすらは、その仕事がいやなんだね？」

「だけど、もう…どうにもならないわ。あたしは、汚れすぎて」

「ねえ、どうしても兄さんじゃなきゃ、だめ？」

きつく、唇をかみしめて俯いたゆすらを、青蘿は切なげに見つめた。

「え？」

潤んだ青い瞳に見つめられ、ゆすらは赤くなってしまった。浅はかなのは、俺も同じだ。

一時だけでも、彼女の傍にいたいと思っってしまった。

兄さんは、絶対ここに、ゆすらを迎えに来るだろう。

その時が来るまで、せめて愛させて欲しい。

「たとえ一時だけでも、俺はゆすらが好きだ。行かないでくれよ」

「青蘿：」

吹きぬけた柔らかな風に、青蘿の銀髪が、流れて揺れた。

ゆすらは、花の合間をひっきりなしに走り回る、子兎たちを見つけて微笑んだ。

「見て…あの子たち、隠れん坊でもしているのかしら？」

「…みたいだな。あいつらも、俺の弟なんだよ？」

「ずいぶん、年が離れてるんじゃない？」

きよとん、と首を傾げたゆすらに、青蘿はそつと口づけてから笑った。

「まあね、俺たちは兄弟が多いからな…あいつらは一番下の奴らだよ」

「かわいいわね…あの茶色の子、翡翠にそっくり！」

ゆすらが指をさしたのは、つやつやとした茶色の毛並みを、一生懸命に毛繕いしている子兎だった。

「あいつは緋呂ひろっていうんだよ…それより、こんな時ぐらい…兄さんの話なんかしないでくれ」

抱き締める青蘿の腕の中で、ゆすらは遠くを見つめる様な、複雑な目をしていた。

「青蘿、苦しいわ？」

「ゴメン、出来心だ…。あいつら呼んでくるから、待ってて」

青蘿の背中を見送ると、ゆすらは一筋、溜息をついた。

「気持ちは嬉しいけど、あたし…あなたに伝えてあげられない。あなたを、傷つけちゃう」

ゆすらは、頭を抱えて屈みこんでしまう。

そんな時、しゃがんだゆすらの足元の茂みが、かさかさと動いた。頭をのぞかせたのは、先にゆすらが、かわいいと言って、指さした子兔だった。

「おねえちゃん、おねえちゃん？」

「え？」

ゆすらが顔をあげると、茶色の子兔が、小さな前足を一生懸命に伸ばして、ゆすらを見つめていた。

「悲しいの？どこか痛いの？」

ゆすらが、涙を拭ってから首を振ると、子兔は、手に頬ずりをしてから人の姿になった。

「泣かないで、おねえちゃん……」

緋呂は、おろおろとゆすらの周りを右往左往する。

「ありや……見当たらないと思ったら、先に来てたのか」

その声にゆすらが振りむくと、腕いっぱい子兔たちを抱いた、青蘿が立っていた。

「兄さん、お願い、おねえちゃんの傍にいてあげて？僕じゃダメなの、だから……」

緋呂はぐいぐいと、青蘿の手を引いて、ゆすらの手と握りあわせる。「おねえちゃん、僕もね……時々、おねえちゃんみたいになるの。そしたらね、必ず『負けるな』って、誰かが傍にいてくれるんだ。だから、おねえちゃんも、絶対ひとりぼっちじゃないよ。もう泣かないで？」

「ありがとう、いい子ね……」

「えへへ……おねえちゃん、お母さんみたいだあ」

につこりと笑ったゆすらと、一緒に緋呂も笑った。

儂げに笑う彼女に、意を決したように、青蘿はゆすらを抱き上げた。いわゆる、『お姫様だっこ』である。

「せつ、青蘿！？おろして……くれる？」

居心地の悪さに加えて、恥ずかしさが急激に増していく。

「ダメだよ、離してあげない」

真っ赤になりながら、じたばたともがくゆすらに、青蘿は貪るむさようなキスをした。

「兄さん、このお姉ちゃん、だあれ？兄さんのお嫁さん？」

興味津々に尋ねてくる弟たちに、ゆすらは慌てる。

「あ、あたしは違うのよ…翡翠のっ」

そこまで言いかけたゆすらの言葉は、おどけた青蘿の声に、すっかりかき消されてしまった。

「兄さんも、まだ来そうにないし…俺が貰っちゃおうかなあ？」

「ちよつ、ちよつと青蘿？」

ゆすらは、慌てて弁解を試みるが。

「兄さん、翡翠兄から略奪するの？」

「略奪愛だねっ、うわぁ泥沼…」

とかなんとか…。

子供のクセに、なぜか非常に世辞慣れている彼の弟たちに、ゆすらは強く額を押さえた。

口を、はさむ余地がないっ！

「きゃ…」

急に、銀兎に戻った青蘿に押し倒される形で、白銀色の月光花の群れに、倒れ込んでしまった。

銀の光を散らして、花びらが散る。

「ゆすら…」

ペロリと頬を舐められ、ゆすらは青蘿を見た。

自然と頬が赤く染まる。

それに負けじと、子兎たちもが彼女に群がった。

「兄さんだけずるい、僕たちも、お姉ちゃんにだっこして欲しいのっ」

「ゆすら、俺…保証できないよ、やっぱり。君が好き」

「ダメ。分かってるでしょ？あたしは、あの人しか、愛せない。だから…」

辛そうに絞りだしたゆすらは、ふい…と顔を逸らした。

「いやだ！俺は、本気だよ？迎えが来てしまつまで、それまででもいい。せめて、それまで君を愛させてくれ」

彼の、剣幕に驚いた子兎たちが、ゆすらにきつく身を寄せた。

「あたしも…あなたが、ううん、ここにいてくれる、あなた達みんなが好きよ。だけどね、違つたよ…『好き』と『愛してる』は「

loveは、likeとは違つ。

似ているけど、まったく別の感情^{もの}。

「そっか…そうだよ。俺、悔しいけど君を諦めるよ…なぐんで、言うと思つたら大間違い」

くるりと歪んで、青蘿は人の姿に戻る。

「え？」

満面の笑顔で破願した彼に、全体のテンポが一拍、いや二拍以上がずれた。

「俺は気が長いからね、気長に待つか…。ったく、兄さんもずるいなあ、こゝんな美人の彼女がいて」

「やめてよ、おだてたつてムダなんだから」

言うがしかし、げらげら笑いなので、まったくもって、説得力がないのだった…。

ゆすら…もう一つの姿（前書き）

傷つき、翡翠と引き裂かれてしまったゆすらは、翡翠の弟・青蘿^{せいら}の館である広寒宮^{こうかんきゅう}で保護されていた。

叶わぬと知っ^つていても尚、ゆすらに淡い想いを寄せる青蘿。

ゆすらを『お姉ちゃん』^{おねえちゃん}と言って慕^こう、翡翠と青蘿の弟・緋呂^{ひろ}と子兔^{うさぎ}集団も加わ^{くわ}ってなにやら賑^{にぎ}やかに…。

ゆすらと翡翠は、無事に黄兔一族の陰謀を破り、再会^{さいかい}することができ^きるのか!?

靈感少女・神崎ゆすらと、ワガママで、口が悪くて態度^{たいど}のでかい、けどなぜか憎^{にく}めないヤツなウサギ妖怪・翡翠との珍道中^{めづらし}。

ゆすら…もう一つの姿

一方その頃、ゆすら救助隊(?)の二人はというと…。

「一牙っ！てめえ、また間違っただな…なんでこんな場所に出たんだか」

「はえ…一本下の道に出ちまったのかあ、やばいなー」

深々と溜息をつく一牙に、翡翠は噛みついた。

ちなみに、徹底的に二人の会話は、会話として機能していない。

しかも二人は…。

なぜか、蒿里とは真逆に位置する、崑崙山こんろんの山麓に突っ立っているのである。

簡単に言えば、迷ったのだ。

「はあ…ゆすらあ、おかしな事になっちまったぜ」

「けっ、これだからジジイはよお…さつさと方向転換するぞ！」

ぽつりと呟いた一牙に、翡翠は「お前が迷ったからだ」と毒づいて、
「またも噛みつく。」

一人、走り出した翡翠の背中に、一牙はやれやれと、首を竦めたのだった。

なんだこの、ひどい胸騒ぎは…。

嫌な予感がする！

これは、ホントに急いだ方がいいみたいだ。

翡翠は、疾駆しながら体の形を歪ませる。

まるで、飴でも溶けるかのように、人間の姿が拉ひげて、あつという間に黄兔の姿に戻っていた。

「おう、随分と焦れてんじゃねえか？」

走る翡翠のすぐ横に、赤毛の豹猫が並んできて、一牙の声で茶々を入れる。

「ったりめえだ！あのババクソ(朱明の事)めえ、今すぐにでもぶちのめしてえっ」

ギリギリと歯噛みする翡翠に、一牙は、目を三日月形に歪めてニヤリとした。

「ゆすらだつて、ただ…やられるだけじゃねえと思うぜ？あの方は、そこらの雑魚なんか、比べモンにならねえくらいに強いんだ」

「ああ：確かに、もの凄え霊圧だもんな。しかも『始末人』だし」
なにか面白くなって、鼻の頭に皺を寄せた翡翠に、一牙はぷつと吹き出して見せた。

「お前、ゆすらのオトコのくせに、随分と鈍いんじゃないか？」

「んなつ、なんだとつっ！」

「あんなに、霊圧の強い人間がどこにいる？あれは霊力なんかじゃなくて『妖力』だよ」

「ゆすら、人間じゃねえのか!？」

翡翠は目を剥いて、動かしていた足を急停止させた。

「ふうむ、人間だが…：それでもないとも言える。半妖ハーフなのさ。だが…：どちらかといえば、ゆすらは妖怪側の人だな」

「妖怪つて、属は!？種属はなんだっ」

一牙は、うるたえる翡翠を見て、面白そうにニヤリとした。

こんなに、動揺する翡翠を見たのは初めてだ。

余程驚いたんだろう、両耳が、ぶるぶると震えている。

「聞いても、ビビって死ぬなよ？ゆすらの本性は饕餮トウテツだ。ゆすらの父上が饕餮だった」

「とつ、饕餮…!？ここ怖くなんかねえぞ？てか、普通に惚れ直したっ」

言葉とは裏腹に、饕餮と聞いて、一瞬にして凍りついた翡翠。

「ほ〜う？その割にや、逆立ってんぞ？毛皮」

「うっ、うるせえやい！さっさとゆすら奪還だっ」

背中の毛皮を逆立てて、翡翠はガリガリと、憤然として地面を引っ掻いた。

「へいへい、見栄っ張り君」

「るせえ！まだ言うかてめーっ」

「バカ兔！…見栄っ張りのバカ兔！」

ぴよんぴよんと、跳ね回って翡翠をからかう一牙。

「歌うなっ、待ちやがれってんだ、コラ！」

「やーだね〜」

一牙のからかいに簡単に乗せられる、単純おバカな翡翠なのであつた…。

『饕餮』とは冷酷無慈悲で、妖怪のランクとも言える妖力が桁外れに強い、最強の殺戮者の称号だ。

黒く、滑らかな体躯。

左右、赤と青の色違いの瞳・オッドアイを持つ。

再び走り出した二人の背を、砂混じりの大風が押した。

まるで、意志でもあるかのように…。

一路、目指すは蒿里！

「つくしゅん！やだ、カゼかしら」

と、ベタな反応をしたのはゆすら。

天然の水晶石に座る彼女には、びっしりと子兔たちがごびりついている。

「随分と気に入られたようだね、しかも寝てるのもいるし…」

傍に来た青蘿は、ゆすらの膝の上で眠る、子兔たちを見て微笑んだ。ゆすらの膝の上で眠る子兔たち。

たまに小さな、すべすべとした耳が動いている。

「そろそろ中に入ろうか？冷えてきたからね」

「そうね、でも…この子たち、起こしてしまうのが可哀相」

ぎゅうと、背中から抱き締めてくる青蘿の手を撫でて、ゆすらは困った顔で笑った。

瞬間、大風が彼らを激しく殴る。

「ひゃあ、寒いよう」

人型になった緋呂が、ゆすらに強くしがみついたのを皮切りに、テ

ラスにいた三人と数匹は、冷えきった夜風に追われて、宮内に逃げ込む形となった。

強風の吹き荒れる、テラスから避難してきたゆすら達は、一段落して暖炉前でまどろんでいた。

しかし、まどろみも束の間、暖炉の前でうとうととしていたゆすらは、子兔集団と、緋呂の集中攻撃に、またも撃沈してしまっていた。

「お…重いわよ、ちよっとお」

「だっこして〜」

「だっこ〜」

「お母さんみたい〜」

「お姉ちゃん、温か〜いv v」

「も〜う、こうなればヤケクソっ」

甘えてくる、子兔たちを抱き締めて頬ずりすると、嬉しそうにはしゃぐ声が耳を撥る。

ゆすらは、緋呂（人型の）をだっこしたまま、榻に座る青蘿を振りむいた。

「あなた達のお母上は、どんな方？」

尋ねたゆすらに、青蘿は、紺碧の瞳を一瞬だけ、どこか悲しげに翳らせた。

「優しい人だよ…いつも、周りを包んで和ませてた」

「そう、会ってみたいなあ、翡翠と、貴男のお母上だもの、さぞ綺麗なヒトでしょうね」

「残念だけど…それはムリだよ、もう消滅してしまった」

「消滅…して」

消滅、それがなにを意味するのか。

ゆすらだつて分かっている。

父の最期を、見取ったことがあるからこそ。

妖は、滅多なことでは死なない。

それは、個体の寿命であったり、他の妖から受けた深手だったりさ

まざま。

目を剥いたゆすらに、青蘿は苦笑して見せてから語り始めた。

「うん、殺されたんだ…武器の材料として、人間に。だから父上は、君と翡翠を許せなかったんだね。俺たちは、滅多なことがない限り、人間には手出ししない。だけど、父上だけは考えが違うらしい」

「なら、どうしてあたしを助けたの？あたしだって、人間よ？」

ゆすらは、言葉の裏に潜む、深い憎悪を悟って、きつく唇をかみしめた。

「ゆすらは、全部が人間じゃないだろ？かなり、強い妖気を感じるから」

「そっか、やっぱり人間には見えないか…容姿かたちだけじゃゆすらは、一つ溜息をして、切なげに微笑んだ。

「ハーフだね、けどかなり妖に近い…。なんの種属か、聞いてもいい？」

心なしか、青蘿の顔が強ばっているように見えて、ゆすらは内心で自らを嗤わらった。

翡翠が、自分の本性を知ったときは、こんな顔をするのか、と。

「怖い？青蘿」

「うん、怖い…けど、知りたいんだ。教えてくれるかい？」

ひた、と紺碧の瞳に見つめられて、ゆすらはコクリと小さく頷いた。

「いいわ、本性を明かす。けど、キライになっちゃ嫌よ？」

「ああ、約束する」

緋呂と子兎たちは、緊張感がないというか…退屈して、いつの間にか眠っていた。

「ホントね？あたしは」

瞬間、ゆすらを、青い霧状のものが包んだ。

濃い霧のせいで、視界は全く見えない。

やっと霧が晴れて、現れたゆすらを見た青蘿は、戦たたかき、座り込んでしまった。

まず青蘿が見たのは、赤と青…左右対称の瞳。

そして、深闇を固めたようで、滑らかで華奢な、狼の形をした妖怪だった。

「と…饜饉、まさか」

「これが、あたしの本当の姿。殆どは人間の方で過ごしてるけどね」

饜饉になったゆすらは、フサフサと尻尾を振る。

「撫でて、いい？」

おそろおそろ伸ばされた青蘿の手に、ゆすらは噛む振りをして、彼を散々にからかった。

「もう、人の悪い…程々にしてくれよお」

「だーって、面白いんだもん…そんなようなゲームが、昔あったのよ」

「うわあ、マジで？ろくでもないゲームがあるもんだ」

ぞぞ〜と、背中が寒くなった青蘿は、しきりに腕をさする。

「うふっ、翡翠と同じこと言ってる。やっぱり兄弟ね」

白く、繊細な指が、ゆすらのすべすべの毛皮を撫でていく。

優しい温みに、ゆすらは、気持ちよさそうに目を細めた。

「ちえ…また兄さんだ、なんか妬ける」

「あら…」

背中に、小さな温みと重さを感じて、ゆすらは背中を振りむく。

振りむいた背中には、びっしりと子兎たちがくっついてた。

饜饉の姿が、全く怖くないらしく、もぞもぞと無邪気に、背中によじ登ろうとしているのもいる。

「あれま…チビたち復活…モテるねえ」

ごしごしと目を擦りながら、緋呂が寄ってきて、甘えて言った言葉に、ゆすらは目を見張った。

「お…母さん」

「え…」

「寝ぼけてるだけだよ…緋呂は、母さんの顔を知らないんだ。きつと、ゆすらに母さんを重ねてるんだろっね」

「独りじゃない孤独と…独りの孤独、どっちが辛いのかしらね？」
切なそうに微笑む青蘿に、ゆすらはぼつりと呟いた。

自分に抱きついたまま、再び眠りに落ちた、緋呂と子兎たちに複雑な顔で微笑んでから、ゆすらは『今はナシね』と首を竦めた。

「ゆすらは？」

ゆすらが、なり代わった黒い獣は、伏せていた状態から、起きあがるようにして人間の姿に戻った。

湯浴みを終えて、部屋に戻ったゆすらは、ベッドに座ろうとして、一瞬その動きを止めた。

ベッドの衾が膨らんでいるのだ。

しかも、三つ連なるように。

時偶、もぞもぞと動く小さな侵入者に、ゆすらはくすくすと笑ってしまった。

「ここにいるのね、出ておいで？」

つんつんと、膨れた衾をつつくと、『きゃあ』『きゃあ』『きゃあ』と声がする。

「だから言ったじゃないか、すぐ見つかったやつって…別の場所にしようって、言ったのにい」

もぞもぞと、始めに顔を出したのは、茶色い毛皮の緋呂。

それに続いて、白と銀色の兄弟兎も、顔を覗かせた。

「あらまあ」

「ごめんね、お姉ちゃん…僕たち、お姉ちゃんが心配だったんだ」

「心配？」

きよとんと、首を傾げるゆすらに、緋呂はつぶらな瞳を、うるうると潤ませた。

その瞳は『叱らないで？お願い』と言っている。

彼らの心遣いが嬉しくて、ゆすらは子兎たちを抱きあげた。

「ありがとね、嬉しい。ふくふくしてて温かい」

ゆすらは、子兎たちを抱いたままで、ころんとベッドに転がった。

「お姉ちゃんも、いい匂い〜」

「お母さんみたい、ふわふわしてる」

腕の中で、居ずまいを整えた子兔たちは、小さな体を精一杯、ゆすらにすり寄せて甘える。

次第にまどろんできたゆすらは、小さく欠伸をすると、ゆっくりと眠りの深淵に沈んでいった。

少し、休憩…。

そしてまた、次の日には元気に。

どんなことも、急ぎすぎは禁物。

翡翠の迎えが来るまで、のんびり行こうよ？

ゆすら…もう一つの姿（後書き）

どうも、維月です。更新が遅くて済みません。

作中の、緋呂とゆすらのコンビが密かなマイブームだったり（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023a/>

のんびり行こうよ？

2010年10月9日01時04分発行